

長崎県文化財調査報告書 第104集

# 長崎県埋蔵文化財調査集報 XV

1992

長崎県教育委員会

## 発刊にあたって

このたび、長崎県埋蔵文化財調査集報XVを刊行することになりました。集報には、長崎県教育委員会が実施してきました緊急調査の中で、比較的小規模な調査の結果を収録しております。

今回の集報XVには、夫婦石遺跡（上県町）、大根坂遺跡（大島村）の調査結果を収録しました。

埋蔵文化財は、私たちが遠い祖先から受け継いできた貴重な遺産であり、将来にわたって保存するとともに、広く活用を図りながら後世に伝えることが文化財保護行政の責務であります。

そのため、発掘調査に当たっては、できるだけ精密な観察と詳細な記録を取るよう努めました。

この報告書が県民の文化財に対する理解と愛護への一助となり、また、学術研究の新たな資料として役立つことを願うものであります。

平成4年3月

長崎県教育委員会教育長 清浦義廣

# 総目次

I 夫婦石遺跡 .....	1
II 大根坂遺跡 .....	39

## 凡例

1. 本書は、長崎県教育委員会が行った下記遺跡の発掘調査報告書である。

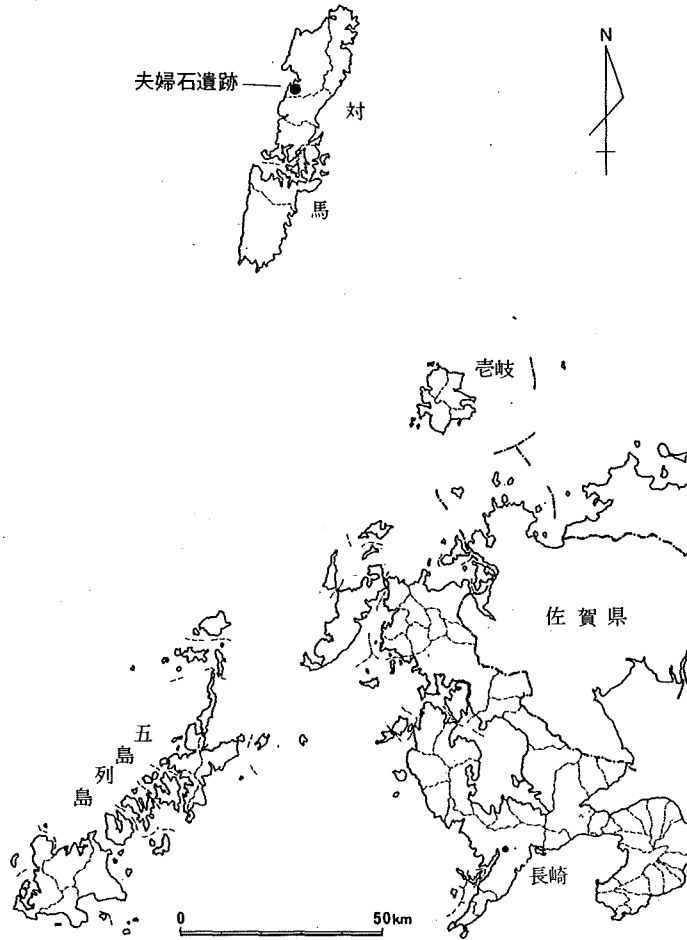
めおとし  
夫婦石遺跡 縄文時代前期から中期にかけての遺物包含地。  
朝鮮半島の櫛目文土器が多量に出土した上県郡上県町所在の遺跡。

おおねざか  
大根坂遺跡 弥生時代中期～後期を主体とする遺物包含地。  
北松浦郡大島村所在の遺跡。

2. 本書の編集は、副島和明が担当した。

# I 夫婦石遺跡

—上県郡上県町所在—



## 例 言

1. 本報告書は、昭和63年度に実施した、長崎県上県郡上県町大字久原字シケノ脇47番地に所在する夫婦石遺跡範囲確認調査報告書である。
2. 調査は、上県町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が調査を担当した。
3. 調査関係者は下記のとおりである。

調査主体 上県町教育委員会

調査担当 長崎県教育庁文化課

主任文化財保護主事

副島 和明

長崎県文化財保護指導委員（当時）

原田 源

4. 本報告書の執筆は、副島が担当した。
5. 遺物の実測は、正林 護（文化財調査員）、副島が行い、調査および遺物写真は、副島が担当した。
6. 本報告書の編集は、副島による。
7. 出土遺跡及び原田 源氏採集の遺物と図面・写真類は、現在県文化課で保管している。

## 本文目次

I	調査に至る経過	5
II	遺跡の地理的歴史的環境	7
III	調査	13
	1 調査概要	13
	2 土層	14
	3 遺物の出土状況	14
	4 遺物	
	(1) 土器	16
	(2) 石器	23
IV	まとめ	25

## 挿図目次

第1図	夫婦石遺跡周辺地形図	6
第2図	周辺の遺跡(1)	9
第3図	周辺の遺跡(2)	10
第4図	調査区配置図	13
第5図	土層断面図	15
第6図	C調査区下層(第Ⅶ層)出土土器	16
第7図	C調査区上層(第Ⅵ層)出土土器	17
第8図	B調査区(第Ⅲa～Ⅲd層)出土土器, 表土・表採資料	19
第9図	表土・表採資料	20
第10図	B調査区(第Ⅲa～Ⅲd層)出土石器, 表土・表採資料	22
第11図	表土・表採資料	23
第12図	対馬の主要縄文時代の遺跡	24
第13図	橿目文土器出土遺跡地名表	27

## 表 目 次

表. 1 上県町内遺跡地名表 .....11

## 図 版 目 次

図版. 1 遺跡遠景・鹿見湾奥部 .....31  
図版. 2 遺跡近景 .....32  
図版. 3 C調査区土層写真・B調査区第Ⅲa～Ⅲd層遺物出土状況写真 .....33  
図版. 4 C調査区（第Ⅶ層・第Ⅵ層）出土土器 .....34  
図版. 5 B調査区（第Ⅳ層）出土土器，表土・表採資料 .....35  
図版. 6 表土・表採資料 .....36  
図版. 7 B調査区（第Ⅲ層）出土石器，表土・表採資料 .....37  
図版. 8 調査風景・鹿見湾奥部 .....38

## I 調査に至る経過

上県郡上県町の西南部分の西海岸に鹿見湾がある。この港口に、昭和63年度新産業育成事業として海岸保全を兼ねた道路建設工事が、町建設課で計画された。

この付近の海岸は、縄文時代から古墳時代の土器、石器類と韓国の新石器時代の櫛目文土器が地元在住の原田源氏によって採集され、周知の遺跡として知られていた。

遺跡は、縄文時代前期～中期の包蔵地で、その範囲は一部海底をふくめて、約13,000㎡の分布面積である。

県教育委員会は、当該工事に係る遺跡の取扱いについて、町教育委員会、町建設課と協議を行い、昭和63年10月20日～同年10月21日に現地踏査を実施した。

工事範囲の海岸線は岩礁、礫層で形成され、潮の干満差が激しく、海面下に埋没する部分でもあったので、海岸部分での遺物包含層の有無について確認するために、範囲確認調査を実施することになった。

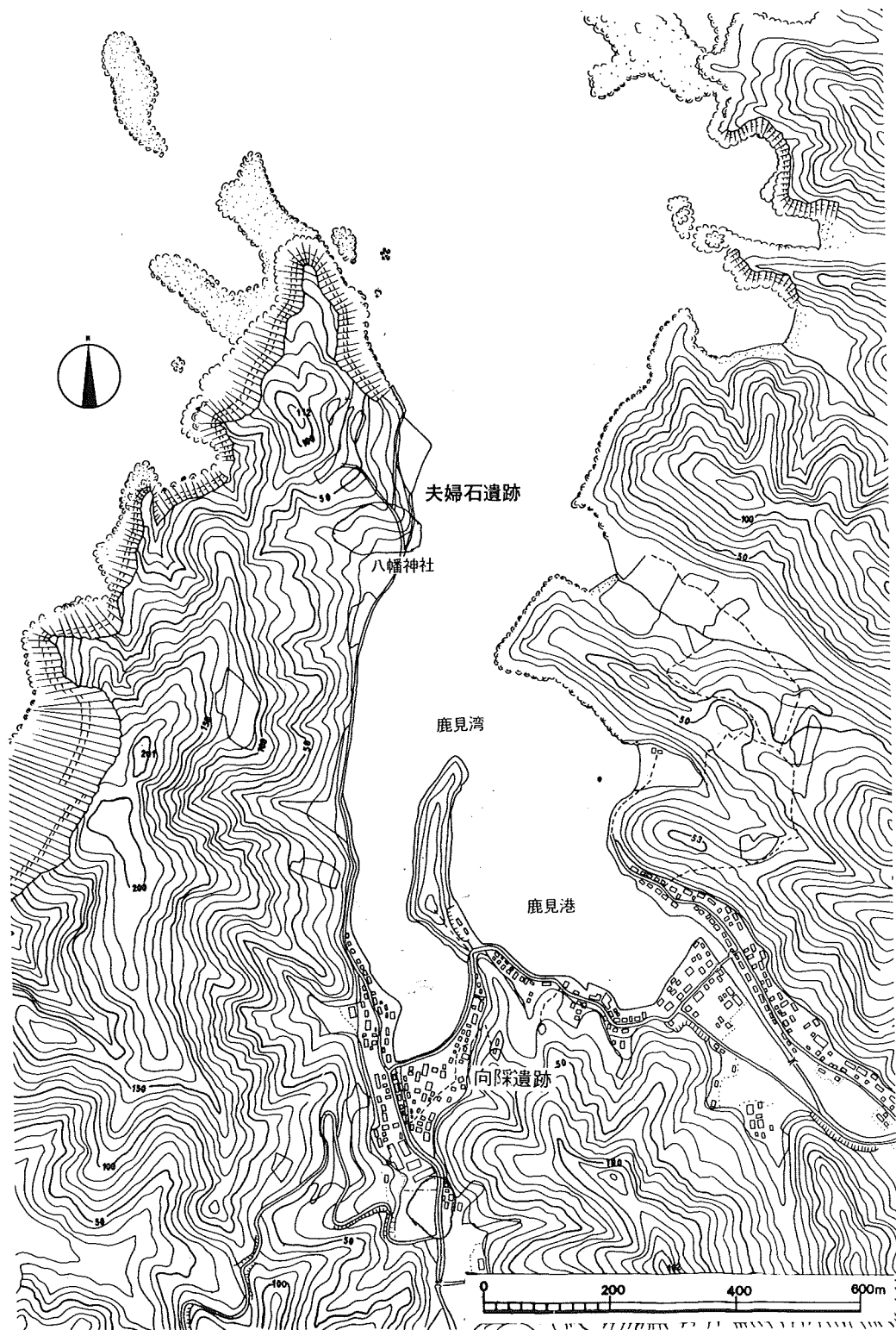
町教育委員会は、昭和63年11月14日～同年11月17日まで、A～C調査区の3箇所について調査を実施した。（発掘調査は、県文化課が担当した）

調査の結果、韓国の櫛目文土器が数多く出土する重要な遺跡であることが明らかになったので、今後の遺跡の取扱いについて再度協議を行い、遺跡の分布する範囲については設計変更で工事範囲から除外して保存することになり、遺跡の範囲外については工事を着工することになった。

その後、対馬文化財調査委員会によって、平成元年8月19日～同年8月20日に無届出による発掘調査が実施された。先の範囲確認調査で重要な遺跡であることが確認され、関係機関の協力で保存することになった遺跡であったので、このような軽率な行為が行われたことは、文化財保護行政を推進する上で、文化財担当者および研究者の文化財保護法の理念に基づいた、遺跡の取扱いについて認識を喚起するものであった。

このようなことは、二度と起こしてはならない行為であるので、非常に残念なことであった。





第1図. 夫婦石遺跡周辺地形図

## Ⅱ 遺跡の地理的歴史的環境

対馬は、行政的に上、下県郡の2郡6町から構成されている。その規模は、南北約82km、東西18km、面積710km<sup>2</sup>程で、南北に細長く横たわり、周囲は朝鮮海峡、対馬海峡、日本海に面している。

上県町は、対馬の南西部に位置し、西に開口する仁田湾がある。その北岸に志多留、伊奈、越高、南岸に久原、鹿見の各浦が発達している。これらの浦々に、志田留川、仁田川、飼所川、鹿見川等の河川による沖積地が形成され、縄文時代から現代に至るまで、生活の場として利用されている。

遺跡は、鹿見、久原湾の西側湾口に当る。鹿見湾と朝鮮海峡とを經てる細長い丘陵が突出している。その東側裾部の海岸線を町道久原海岸線が、久原から八幡神社まで通じ、その先は林道尾崎唐崎線となり、丘陵先端部分まで延びている。その八幡神社境内付近一帯の標高0m～10mに当り、東側の範囲は一部海底を含んだ海岸部分で、西側は浅い谷部付近までの範囲に分布を示す。

対馬は後漢書の三国志魏志東夷伝の倭人伝によると「始度一海干餘至對海国其大官日卑狗副日卑奴母離所居絶島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑有干餘戸無良田食海物自活乘船南北市糶」と弥生時代後期頃の対馬の状況が記されている。

また、上県町佐須奈港からは、韓国釜山市まで約50kmで、千俵蒔山から晴れた日など朝鮮半島が遠望出来る程の近距離である。

### 周辺の遺跡

上県町内には、縄文時代から近世に至るまで、周知の遺跡は38箇所を数える。縄文時代の遺跡6箇所、弥生時代の遺跡23箇所、古墳時代の遺跡15箇所、中世、その他4箇所の計48箇所がある。（複合した遺跡は時代別に加算したので、遺跡数が多くなっている。）町内は南北に細長く、東は山岳地帯、西は海岸線という地理的要因については先述したが、この地理的要因と遺跡の立地も相関関係を示すようで、町内の5地区に遺跡が集中する傾向が窺い知れる。

町内を北から、佐須奈地区、佐護地区、志多留地区、仁田地区、鹿見地区に分け、遺跡の概観を述べたい。

佐須奈地区 古墳時代の包蔵地の塚崎遺跡と近世の番所跡の2箇所である。

佐護地区 縄文時代から平安時代の遺跡が17箇所ある。その内、弥生時代の遺跡は、12箇所を数える。縄文時代の遺跡は、昭和59年9月に町教育委員会が洞穴内の調査を実施し、黒曜石製の遺物と古墳時代の須恵器片が出土したコウブリヤ洞穴がある。弥生時代の遺跡の11箇所は、墳墓群および銅矛の出土地である。井口浜遺跡、檀原遺跡、ゴンクマ遺跡、クビル遺跡、八幡

ダン石棺墓等より銅矛が発見され、ハカタンクマ遺跡、ヘボノダン遺跡からも銅矛が発見されたと伝えられている。また、段の下遺跡、八幡ダン遺跡、井口浜遺跡からは、弥生式土器、石器等の遺物が採集されている。

これらの遺跡の中で、弥生時代後期の遺跡であるクビル遺跡<sup>註1</sup>は、大正10年に後藤守一により箱式石棺1基が調査され、銅鎮、広形銅矛3本、中広銅矛1本、陶質土器、弥生式土器が発見された。弥生時代後期～古墳時代の白岳遺跡<sup>註2</sup>も昭和23年に東亜考古学会で調査され、石棺墓群が明らかになった。細形銅剣、把頭飾、有鈎銅釧、鉄剣、鉄斧、弥生式土器、漢式土器、須恵器片等が出土している。

古墳時代の遺跡は、先述した白岳遺跡、陶質土器が採集されている小坂遺跡、円形の積石遺構の鷗浮遺跡、飛鳥時代（660年代）の狼煙台である烽火の跡等がある。また、平安時代に築かれた防塁の跡である軍備壇遺跡がある。

志多留地区 縄文時代後期から弥生時代の遺跡である志多留貝塚がある。1948年の東亜考古学会、1950年の九学会、1963年の曾野寿彦、増田精一、1972年の長崎大学医学部等の数次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代後期の貝塚や弥生時代の包含層が明らかになった。遺物は、縄文時代の後期の土器（鐘崎式土器、北久根山式土器）、石器（扁平打製石斧、磨製石斧、石鏃）、骨角器（結合鈎針等）等や弥生時代の土器（板付式土器）、石器（石包丁、挟入状石器、太型磨製石斧等）が出土している。<sup>註3・4</sup>

また、越高浜遺跡（越高、尾崎越高遺跡）では、縄文時代の早期、前期の土器類と共に、朝鮮半島の新石器時代の櫛目文土器、無文土器、降起線文土器が多量に発掘されている。

古墳時代の遺跡は、大將軍山古墳のほか4箇所を数える。古墳は墳丘をもつもので、大將軍山古墳の内部主体は箱式石棺で、鉄鏃、鏡、陶質土器、土師器、管玉、切子玉、ガラス小玉等が出土している。また、万人塚古墳、千人塚古墳<sup>註5</sup>等がある。中世の遺跡として、伊奈久比神社遺跡や阿比留氏の城跡である伊奈在庁跡<sup>註6</sup>がある。

仁田地区 弥生時代の遺跡は、石棺墓の墳墓群が6箇所ある。仁田小学校運動場拡幅工事で石棺墓が半壊状態で発見され、調査が実施されたエイタイノ壇遺跡<sup>註6</sup>から、有柄式磨製石剣、管玉等が出土している。金幕遺跡でも石棺墓から有柄式石剣が出土している。この他に、銅矛が出土した槻の内遺跡、鉾山遺跡、亀の採遺跡、鉾淵遺跡等がある。古墳時代の遺跡は、カガリ積石塚が知られる。

鹿見地区：縄文時代の遺跡が2箇所ある。縄文時代早期の貝殻文土器と古墳時代の土師器、須恵器が、久原小学校運動場で発見された向採遺跡（別称 久原向採遺跡）と縄文時代中期の阿高式土器、朝鮮半島の櫛目文土器が出土した夫婦石遺跡（別称 茂ノ脇遺跡）がある。



第2図. 周辺の遺跡1)



第3図. 周辺の遺跡2)

表1 上県町内遺跡地名表

番号	名称	種別	時代	所在地
1	佐須奈日向改番所	番所跡	近世	佐須奈
2	塩崎遺跡	遺物包含地	古墳	〃 字ツカザキ
3	井口浜遺跡	〃	弥・古	大石ケ塚・字北里(井口浜)
4	烽火の跡	烽火台跡	古墳	佐護千俵蔭
5	軍備壇遺跡	城跡	平安	佐護湊
6	コウブリヤ洞穴	洞穴	縄・古	コヤサ北里
7	小坂遺跡	遺物包含地	古墳	佐護(字小坂)神御魂神社
8	樋原(坂尻)	銅矛出土地	弥生	樋原字北里
9	ゴンクマ遺跡	墳墓	〃	佐護クビル字北里
10	クビル遺跡	〃	弥・古	佐護ゴンクマ字北里
11	佐護段の下遺跡	〃	弥・生	佐護北里字段ノ下(通称経隅)
12	段の下遺跡	遺物包含地	〃	佐護段の下字北里
13	佐護多久頭魂神社遺跡	墳墓	〃	佐護西里(天神多久頭魂神社裏)
14	ハカタンクマ遺跡	銅矛出土地	〃	佐護字カシヲ西里
15	白岳遺跡	墳墓	弥・古	佐護白岳字南里
16	鴟浮遺跡	〃	古墳	佐護鴟浮字南里
17	八幡ダン遺跡	遺物包含地	弥・古	佐護田嶋字南里
18	八幡ダン石棺墓	墳墓	弥・生	〃 〃
19	ヘボノダン遺跡	(銅矛出土地)	〃	佐護ヘボノ字東里
20	中山遺跡	遺物包含地	〃	佐護大平字南里・中山字ヒラクマ
21	大將軍山古墳	墳墓(石棺)	古墳	志多留・大將軍山
22	千人塚古墳	古墳	〃	〃 字茂ケ
23	万人塚古墳	〃	〃	〃 字向平
24	志多留貝塚	貝塚	縄・弥	〃 字茂ケ(シゲ)
25	志多留遺跡	遺物包含地	〃	字瀬滝
26	伊奈在庁	城跡	平・中	伊奈
27	伊奈久比神社遺跡	朝鮮系古瓦出地	中世	伊奈伊奈久比神社
28	越高浜遺跡	遺物包含地	縄文	大字越高字孫坊
29	鉾山遺跡	墳墓	弥生	犬ヶ浦字鉾山
30	槻の内遺跡	〃	〃	檜滝字中川
31	亀の塚遺跡	〃	〃	中栗栖字亀の塚
32	サガリ積石塚	積石塚	弥・古	瀬田字サガリ
33	エイタイノ壇遺跡	墳墓	弥・生	檜滝仁田エイタイノ壇
34	金幕遺跡	〃	〃	檜滝キンマキ
35	鉾測遺跡	〃	〃	飼所字大曲
36	夫婦石遺跡	遺物包含地	縄文	久原字夫婦石
37	向塚遺跡	〃	〃	〃 字向塚

- 註1 後藤守一『対馬国上県郡佐須奈村発掘品』考古学雑誌12-8 1922  
後藤守一「対馬督見録」考古学雑誌12-12, 13-3 1922
- 註2 東亜考古学会「対馬」東方考古学叢刊 2種第六冊 1953
- 註3 坂田邦洋「韓国隆起文土器の研究」昭和堂印刷出版事業部 1978
- 註4 坂田邦洋「対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究」1978
- 註5 日本城郭大系
- 註6 長崎大学医学部解剖学第二教室 坂田邦洋氏により, 昭和48年発掘調査

### Ⅲ 調査

#### 1 調査概要

仁田湾の南岸に鹿見湾と朝鮮海峡をへだてる細長い丘陵があり、先端部に近く、鹿見湾に面した所に八幡神社があり、遺跡は神社境内付近の標高10mから海岸部分の標高0mに立地する。

遺跡の範囲は、海岸部分については今回の調査で遺物の包含層が確認され、昭和50年代に海岸部分で工事が行なわれた際に縄文時代中期の阿高式土器片が採集されていることから、海底部分にまで拡がるのが推測される。一方、丘陵裾野の部分については、調査が実施されていないので、分布範囲と詳細な包含状態は不明である。

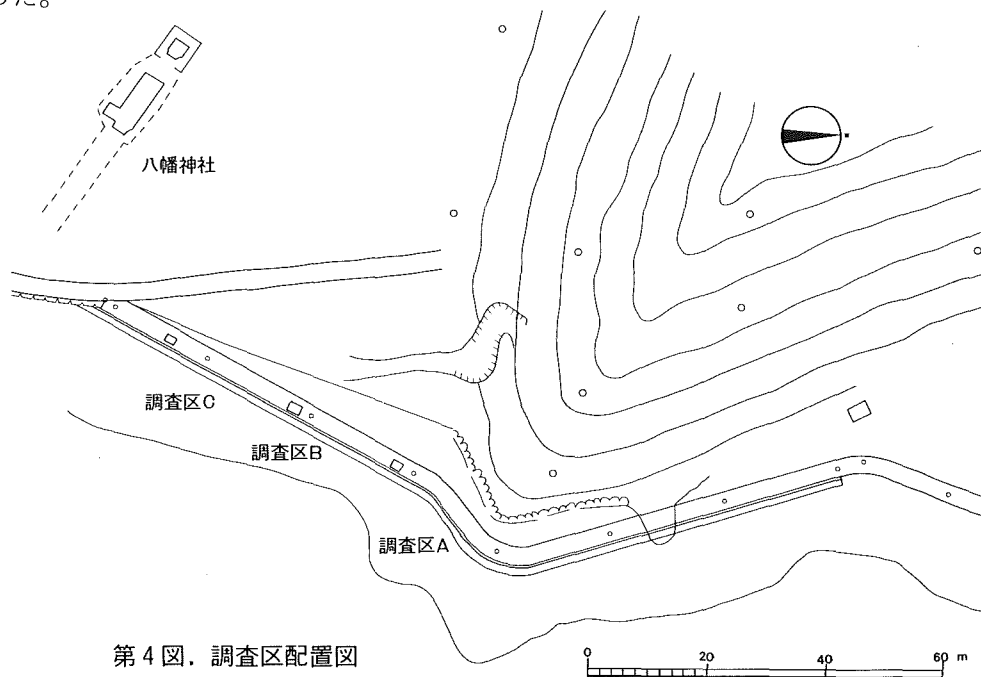
調査は、昭和63年11月14日～同年11月17日までの期間に、調査対象面積660㎡の範囲にA～C調査区（2m×2m）を3箇所設定し、実施した。

A調査区は、礫層と砂層が交互に堆積する状況を呈していた。遺物の出土は無い。

B調査区は、第Ⅲa層から第Ⅲd層に縄文時代中期の土器片が一点と朝鮮半島の櫛目文土器が出土する。また、同層からは、炭化物、焼土塊、魚骨片等が出土しており、調査区の周囲に炉跡が存在する可能性が明らかになった。第Ⅳ層の精査途中で調査を中止した。

C調査区は、第Ⅵ層に櫛目文土器、第Ⅶ層に無文、刺突文の土器片が出土した。また、第Ⅶ層遺物包含層および下層については、調査を中断したままで埋めもどしを行った。

以上の結果から、分布範囲は約1.3haの面積に拡がるものと考えられ、縄文時代の前期から中期にかけての時期に、朝鮮半島との交流の痕跡が認められる重要な遺跡であることが明らかになった。



第4図. 調査区配置図



## 2 土層

A～C調査区の土層堆積状況を見ると、A調査区は小礫混在砂礫層と砂層が互層を呈し、B、C調査区は砂礫層が堆積するなど、各調査区では若干相違を示している。

B、C調査区を中心とした土層堆積状況は、第Ⅰ層～第Ⅶ層に分かれる。

第Ⅰ層……礫層で、拳大から頭大位の玄武岩礫が堆積したもの。約30～100cm。

第Ⅱ層……黄色砂礫層。小礫が混在する。約20cm。

第Ⅲ層……黒色土混在砂礫層。この土層は、B調査区で第Ⅲ層に相当するものが、Ⅲa～Ⅲdの4つに分かれる。いずれも遺物を包含している。

第Ⅲa層…黒色土層。炭化物を多く含む。約10cm。遺物包含層。

第Ⅲb層…赤褐色の焼土層。レンズ状に堆積し、炭化物、魚骨を含む。約14cm。遺物包含層。

第Ⅲc層…灰黒色砂礫層。約0.2m。遺物包含層。

第Ⅲd層…黒色土層。第Ⅲc層より黒色味が強く、また、礫を含まない。約10cm。遺物包含層。

第Ⅳ層……黄色砂礫層。約10～50cm。

第Ⅴ層……灰黄色砂礫層。約20～40cm。

第Ⅵ層……黄色砂礫層。若干粘性に富む。約30～40cm。遺物包含層（C調査区上層）

第Ⅶ層……灰黒色砂礫層。砂を多く含む。遺物包含層（C調査区下層）

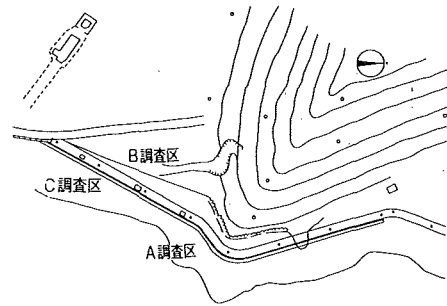
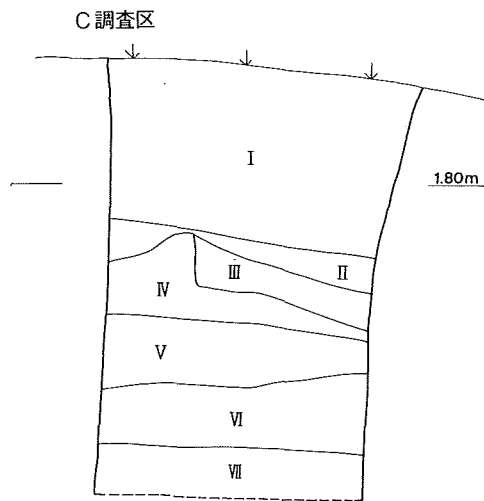
以上で、遺物は第Ⅲa層～第Ⅲd層、第Ⅵ層、第Ⅶ層の3つの文化層から出土した。

## 3 遺物の出土状況

調査区は、遺跡の東側に当る海岸の波打際に3箇所設定した。その内、B、C調査区で遺物が出土した。

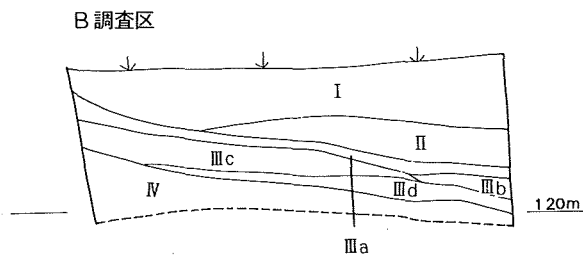
C調査区は、第Ⅵ層～第Ⅶ層の遺物包含層まで、表土礫面より1.6m～2.0m程と深く、潮の干満状況によって、海水が調査区内に進水する状況下で、第Ⅶ層の途中までで精査を中止し、埋め戻した。遺物は、第Ⅵ層黄色砂礫層と第Ⅶ層灰黒色砂礫層から櫛目文土器が出土した。

B調査区は、第Ⅲa層～第Ⅲd層に土器類と石器類が、調査区の北東隅に集中して出土した。また、第Ⅲb層は、炭化物、灰を含む焼土層で、調査区の北東隅に検出されており、炉跡の存在が推測される。遺物は、縄文時代中期の阿高式土器が1点で、他は全て櫛目文土器である。



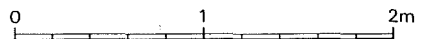
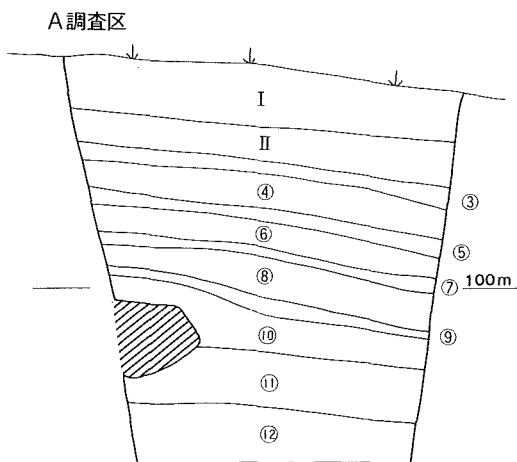
C・B調査区層序

- 第I層 礫層
- II 黄色砂礫層
- III 黑色土混在砂礫層
- III a 黑色土層
- III b 赤褐色の焼土層
- III c 灰黑色砂礫層
- III d 黑色土層
- IV 黄色砂礫層
- V 灰黄色砂礫層
- VI 黄色砂礫層
- VII 灰黑色砂礫層



A調査区層序

- 第1層 礫層
- 第2層 頭大位混入黒灰色砂層
- 第③層 砂礫層
- 第④層 小粒礫混在砂層
- 第⑤層 砂層
- 第⑥層 小粒礫混在砂礫層
- 第⑦層 砂層
- 第⑧層 小粒礫混在砂礫層
- 第⑨層 砂層
- 第⑩層 小粒礫混在礫層
- 第⑪層 砂層
- 第⑫層 小粒礫混在礫層



第5図. 土層断面図

## 4 遺物

### (1) 土器

縄文時代の土器は、B調査区出土50点、C調査区下層出土3点、上層出土5点、表土・表採遺物50点の総数108点を数える。この内、朝鮮半島の楯目文土器が大半を占め、層位的に出土する状況が窺われる。

#### C調査区下層出土（第Ⅶ層）（第6図1～3）

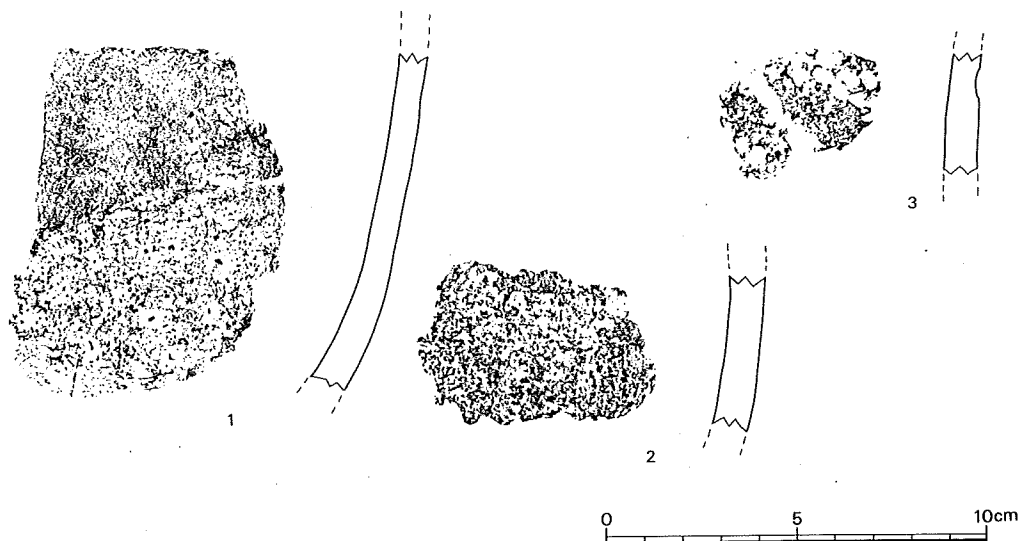
1は、鉢形土器の胴下半部分で、器壁は約9mmと薄く、器表面の半分以上は剥落している。胎土に石英、砂粒を含み、色調は赤橙色を呈す。3点の接合資料。

2は、鉢形土器の胴下半部分で、赤茶色の色調を呈し、胎土に石英、長石、砂粒を含み、無文で内面に横ナデの調整痕が残る。

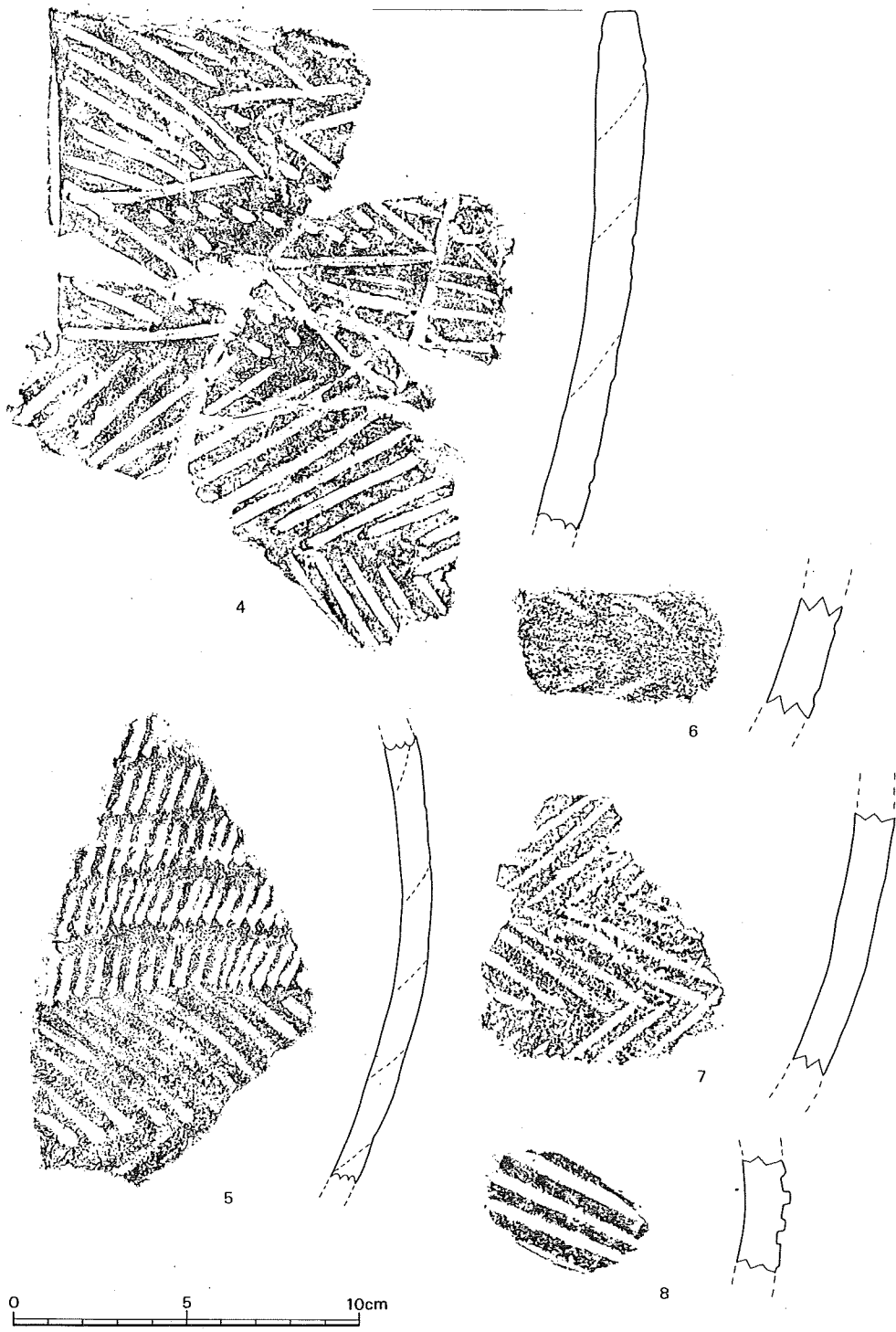
3は、口縁部に近い部分で、外面に2段の刺突文を施し、内面はヘラにより調整を行っている。色調は、赤褐色を呈し、胎土に石英、砂粒を含んでいる。1～3共に器壁が約9mmと薄い。

#### C調査区上層出土（第Ⅵ層）（第7図4～8）

4～8は、朝鮮半島の楯目文土器である。4は、深鉢形土器の口縁部分で、平坦でやや内反する。色調は、茶褐色を呈し、胎土に石英、砂粒を含む。外面は、ヘラによる斜線文と刺突文を組合せたもので、内面はヘラによる調整を施している。



第6図．C調査区下層（第Ⅶ層）出土土器



第7図. C調査区上層(第VI層)出土土器

5は、深鉢形の胴部で、文様はヘラによる短斜線文が5列横走し、その下に三角集線文と刺突文を施している。色調は、茶褐色（内面は、黄褐色）を呈し、胎土に石英、砂粒を含んでいる。

6, 7は、深鉢形の胴部で、沈線による三角集線文の文様を施している。6は、赤橙色の色調を呈し、胎土に石英、砂粒を含んでいる。7は、茶褐色（内面は、赤褐色）を呈し、胎土に石英、砂粒（褐色）を含む。

8は、沈線による集線文の文様を施している。色調は、黄褐色を呈し、胎土に石英、砂粒を含む。

#### B調査区出土（第8図9-29）

9は、鉢形土器の口縁部分で、内反する。文様は、不明で胎土に石英、砂粒を多く含み器面が粗く、色調は黄褐色を呈す。

10は、鉢形土器の胴部で、沈線による格子目文の文様が施され、胎土に石英、砂粒を含み、外面は褐色（内面は、赤褐色）を呈す。表土層に同様な土器が出土している。

11~13, 15は、鉢形土器の胴部に沈線による斜線文を施文したものである。11の色調は、黄褐色を呈し、文様は横走する沈線が1条あり、他は斜行するもので、12の色調は、黒褐色（内面は、赤褐色）を呈し、胎土は共に石英、砂粒（赤褐色）を含む。13, 15は、赤褐色の色調を呈し、砂粒を含む。

16は、胴下半部分で、ヘラによる調整痕が残る。色調は、黄褐色を呈し、胎土に石英、砂粒を含む。

17は、深鉢形の胴部で、輪積み痕の跡を残す擬口縁である。16と同様なヘラによる調整痕が残り、内外面に気孔が有る。色調は、黒褐色を呈し、石英、砂粒を含んでいる。

14は、深鉢形の胴下半部分で、押し文が一部施文され、他は無文帯である。色調は、黄褐色を呈し、胎土に石英、砂粒を含む。

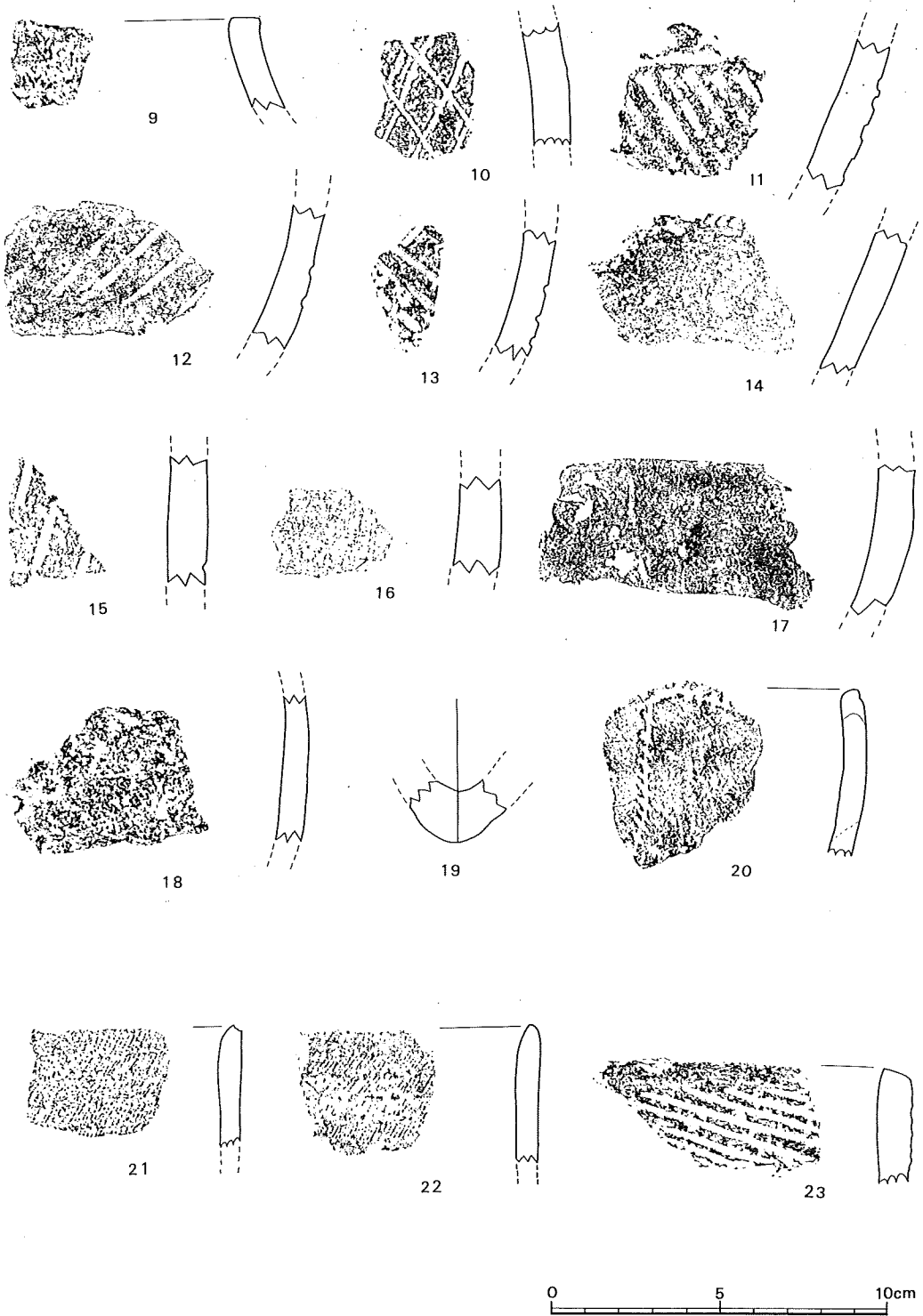
11, 12, 16, 17は、赤褐色の砂粒と石英を胎土に含む特徴をもつものである。

18は、縄文時代中期の阿高式土器である。深鉢形の胴部で、無文帯である。色調は、滑石を多く含んだ赤褐色を呈している。

19は、深鉢形の尖底の底部で、先端が乳頭状を呈し外反する。また、内底面は、残っていない。色調は、赤褐色を呈し、胎土に石英、砂粒を含む。

#### 表土・表採資料（第8図20~23, 第9図24~33）

朝鮮半島櫛目文土器の盛行する時期の遺物（20~29）と縄文時代中期の阿高式土器（30~32）<sup>註1</sup>が出土している。また、上県郡峰町木坂海神神社の弥勒堂跡の発掘調査で出土した遺物（33）

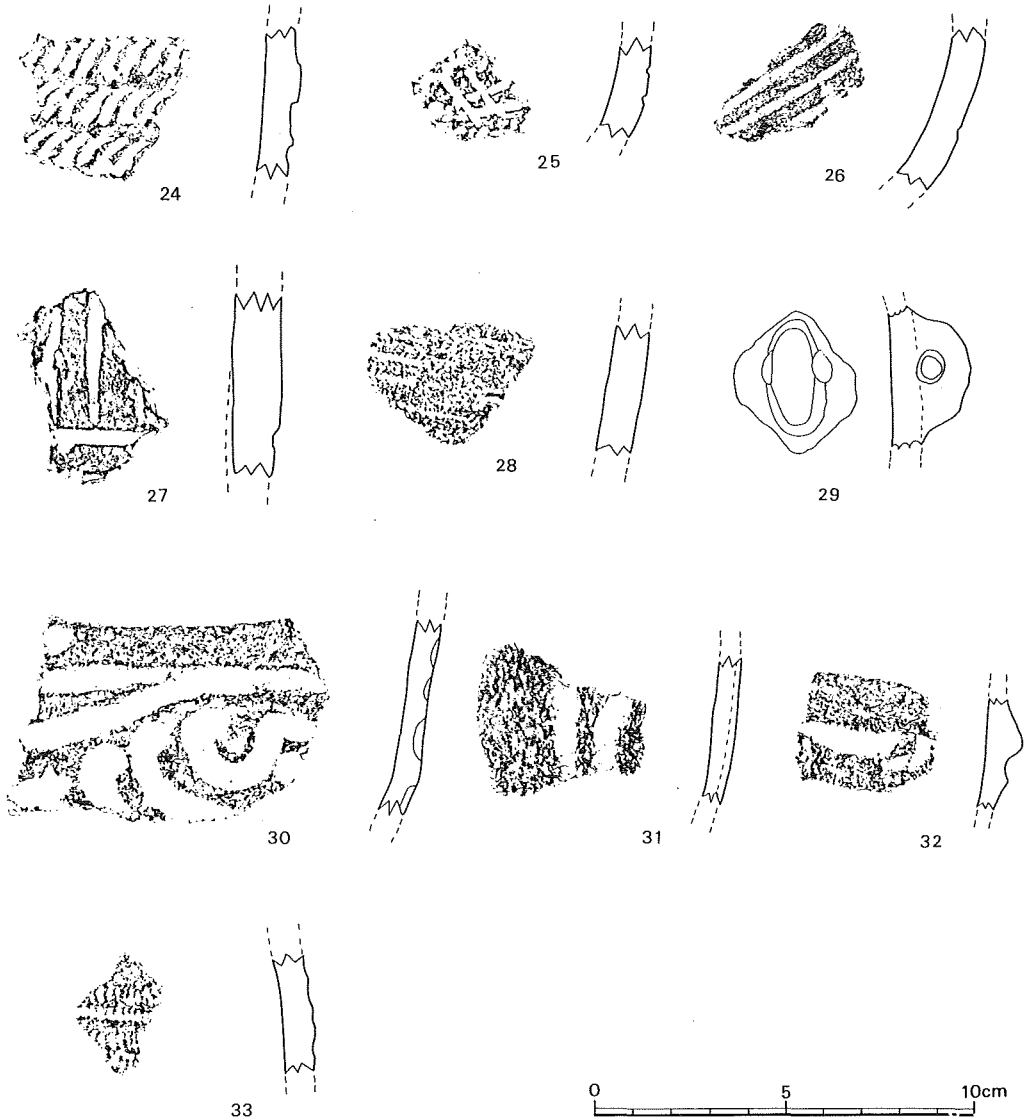


第8図. B調査区(第Ⅲa~Ⅲd層)出土石器, 表土・表採資料

も図示した。

20は、鉢形土器の口縁部分で、ゆるく内弯する。文様は、細い沈線文上に、きざみめを入れるように短沈線を施したもの。色調は、茶褐色を呈し、胎土に雲母、砂粒を含む。

21, 22は、器面の内外に丹を塗った丹塗磨研土器である。甕の口縁部で、外面に横走る短斜線文を施文したものである。21の口縁部分の外側に沈線文の凹みをもつ。21, 22の口縁部は、やや内反する。色調は、黄茶色を呈し、胎土に石英、砂粒を含む。



第9図. 表土・表採資料

23は、深鉢形の口縁部で、文様は斜行する沈線文を施した梯形集線文である。口縁は、やや内反気味で、内面は横方向に条痕が残る。色調は、黄褐色を呈し、胎土に砂粒、石英を含む。

24の文様は、横位にヘラ状施文具で沈線文を施した短斜線文である。色調は、赤褐色を呈し、胎土に石英、砂粒を含む。また、土器の器壁は薄く、焼成は堅微である。

25の文様は、格子目文で、一区画に狭く沈線を施している。色調は、灰黒色（内面は、赤褐色）を呈す。

26、27の文様は、沈線文を施した斜線文である。色調は、26が黄褐色、27は赤褐色を呈し、いずれも胎土に石英、砂粒を含む。

28は、深鉢形土器の胴部で、文様は横位に浅くて細い沈線文を施したものの。色調は、黄褐色を呈し、胎土に石英、砂粒を含む。

29は、胴部に貼付した楕円形状の把手で、中央に円形の穴を有する。色調は、赤橙色を呈し、胎土に石英、砂粒を含む。器形は、壺形土器<sup>註2</sup>であろう。

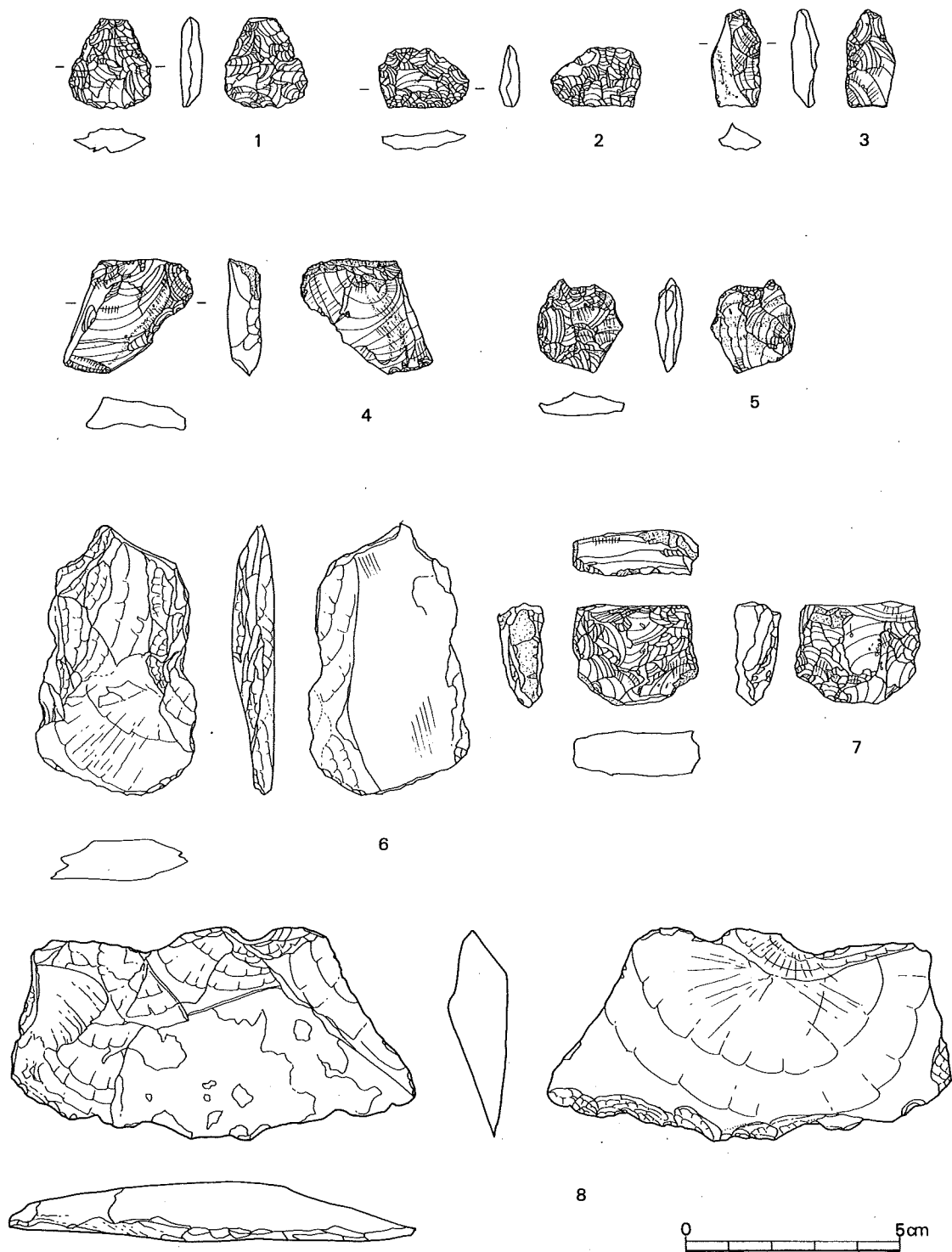
30～32は、縄文時代中期の阿高式土器である。30は、深鉢形土器の口縁部に近い部分で、他は胴部である。文様は、外面に太形凹文で渦巻文等を施文している。色調は、滑石粉末混入で赤褐色を呈す。

33は、櫛目文土器である。文様は、沈線による短斜線文を横位に施したものである。色調は黄褐色で、胎土に石英、砂粒を含む。

註1 平成2年9月に峰町教育委員会で発掘調査が実施された際に、図示した1点が出土したもの。  
県文化課の安楽 努主任文化財保護主事の教示による。

註2 この土器の類似品として、佐賀県呼子町小川島貝塚、福岡県福岡市桑原飛櫛貝塚から出土している。





第10図. B調査区 (第Ⅲ a ~ Ⅲ d層) 出土石器, 表土・表採資料

## (2) 石器

図示した縄文時代の石器は、Bトレンチ出土2点(2, 6)、表土・表採資料7点の計9点を数える。石器の器種は、石鏃、削器、石斧、剥片、石核である。

### 石 鏃 (第10図-1)

1は、楕円形状を呈し、器表裏面に押圧剥離を入念に施し整えたもので、基部はまるみを帯びている。形状は、三角形状を呈し、先端部を欠損している。石材は、黒曜石A製を利用している。

### 削 器・搔 器 (第10図-2~4, 8)

不定形剥片を利用した削器3点(2, 3)と横長の剥片を利用した搔器2点(4, 8)である。2は、楕円形状を呈し、器表裏面に押圧剥離を施し整え、刃部を作り出している。3は、剥片の一侧縁部に2次加工を施したもの(B調査区出土)。4は、不定形剥片を用いたもので、一侧縁部に抉入状に2次加工を施し刃部を作り出したもの。素材剥片の打面は、自然面である。

8は、素材剥片の先端部に器表裏面から粗い2次加工を施し、刃部を形成するものである。石材は、黒曜石A製(3)、その他の黒曜石製(2, 4)、頁岩(8)を利用している。

### 石 斧 (第10図-6)

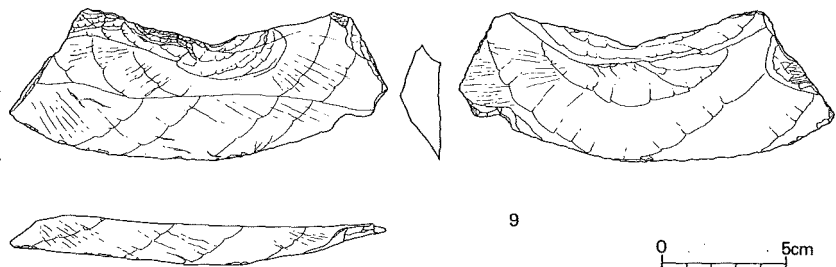
6は、器表裏面に表面から粗い2次加工を施し調整したもので、刃部が扁平な石斧である。基部を欠損している。裏面は、素材原石のなめらかな自然面を利用している。(B調査区出土)頁岩製。

### 石 核 (第10図-7)

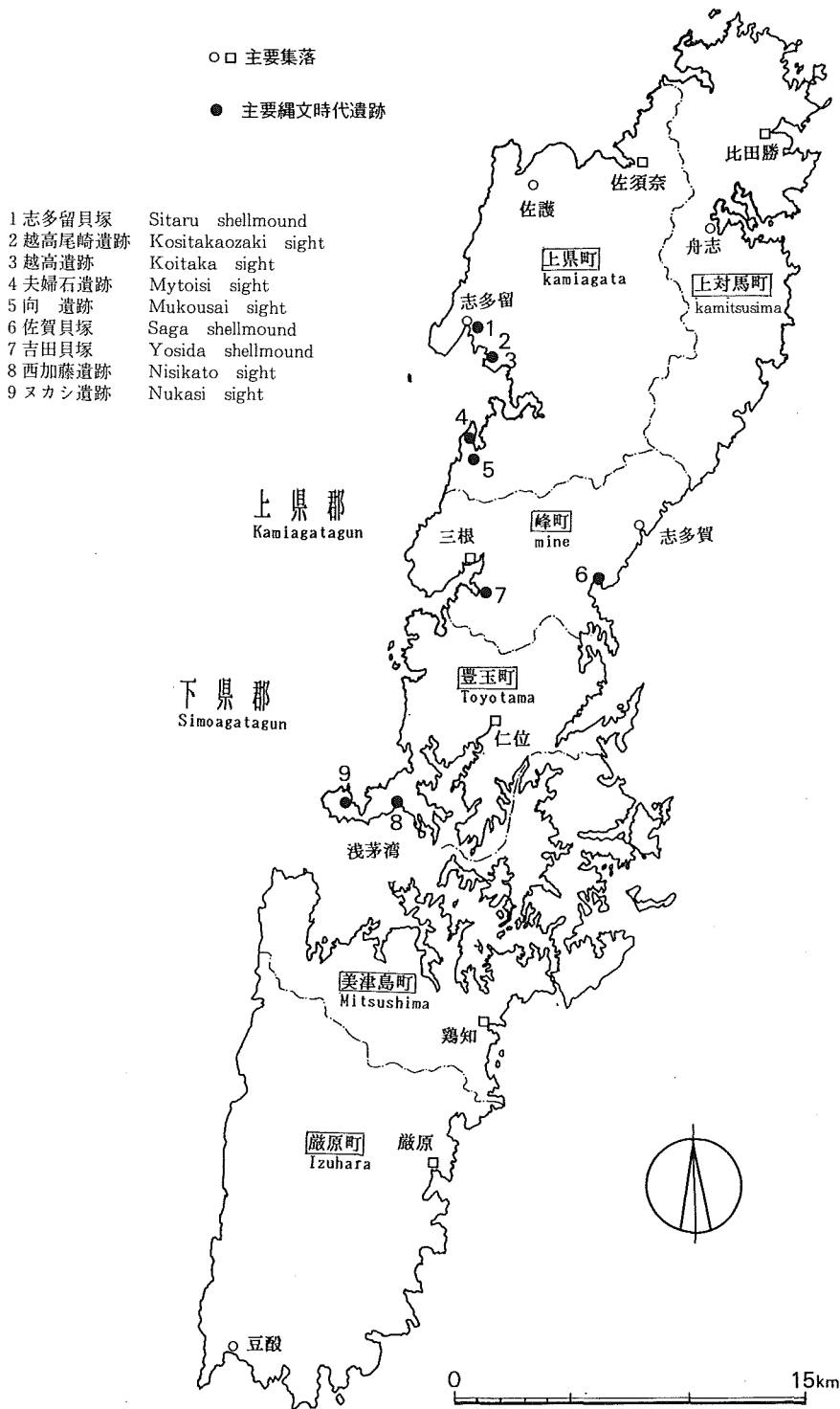
7は、扁平な小形の石核である。打面は、平坦で多方面から剥片剥離を行い、また調整を施している。石材は、その他の黒曜石製を利用している。

### 剥 片 (第10図-5, 第11図-9)

5は、不定形剥片で、先端部を欠損している。9は、横長の剥片で、器表面に調整痕を残す。5, 9共に打面は平坦である。利用石材は、その他の黒曜石製(5)、頁岩(9)を利用している。



第11図. 表土・表採資料



第12図. 対馬の主要縄文時代の遺跡

## IV まとめ

### 出土遺物について

土器は、C調査区の第Ⅶ層、第Ⅵ層に櫛目文土器とB調査区の第Ⅲ層に阿高式土器および櫛目文土器が出土し、狭い範囲での調査にもかかわらず層位的に土器群の変遷がたどれるようだ。

出土した櫛目文土器は、C調査区下層（第Ⅶ層）出土の刺突文を有する土器群→同上層（第Ⅵ層）出土の斜線文、刺突文、三角集線文を有する土器群→B調査区第Ⅲ層（第Ⅲa～第Ⅲd層）出土の格子目文、斜線文を有する土器群である。朝鮮半島の南部地域（釜山市周辺地域）での土器編年に照して見ると、夫婦石遺跡の遺物は瀛仙洞Ⅱ<sup>註1</sup>→水佳里Ⅰ→水佳里Ⅱの変遷に対応するものと考えられる。

また、採集資料の中にも朝鮮半島の櫛目文土器片が確認されている。第8図20、第9図24は瀛仙洞Ⅱに、第8図21、22は水佳里Ⅰに、23は水佳里Ⅱの時期の所産と考えられる。

第9図29は、壺形土器の把手部分で、赤松海岸遺跡<sup>註2</sup>（佐賀県）、小川島貝塚（同）からも類似品が出土し、水佳里Ⅰに対応するものと考えられる。

これらの朝鮮半島の土器群と縄文中期の阿高式土器片1点（表採資料3点）の出土を見るが、数量的には出土数が少ない。

石器は、B調査区の第Ⅲ層から削器、石斧各1点の出土で、組成等については不明である。

### 対馬の縄文時代の主な遺跡

上県町内の遺跡については先述したが、対馬内の縄文時代の遺跡は確認されているのが28箇所と少ない。（同様に、壱岐島でも24箇所と少ない）

その中で、縄文早期の押型文土器片が採集されている向採遺跡（上県町）、縄文早期末から後期にかけての時期で、朝鮮半島の隆起文土器群が出土した尾崎遺跡および尾崎越高遺跡<sup>註3</sup>がある。この遺跡は、夫婦石遺跡と近接した距離にあり、夫婦石遺跡より古い時期にすでに交流の痕跡が確認された遺跡である。また、縄文中期から後期にかけての時期で、小学校運動場建設工事の際に遺物が採集された西加藤遺跡<sup>註4</sup>（豊玉町）、吉田貝塚<sup>註5</sup>（峰町）、佐賀貝塚<sup>註6</sup>（同）、ヌカシ遺跡<sup>註7</sup>（豊玉町）がある。さらに、縄文後期から弥生時代にかけての志多留貝塚<sup>註8</sup>、縄文晩期の住吉平遺跡（豊玉町）がある。

これらの遺跡は、佐賀貝塚を除き対馬北部の現上県郡内の西海岸部分に立地する傾向が窺われる。

### 西北九州地方の櫛目文土器出土地について

日本において朝鮮半島の隆起文土器・櫛目文土器の出土が確認されている遺跡は、長崎県7箇所、佐賀県2箇所、福岡県1箇所である。また、朝鮮半島系および類似土器が松崎遺跡（勝

本町), つぐめのはな遺跡(田平町), 姫神社遺跡(松浦市), 伊木力遺跡(多良見町), 深堀遺跡, 脇岬遺跡(長崎市)等で出土していることが報告<sup>9)</sup>されている。

対馬における櫛目文土器の出土状況および共伴する土器について概観してみたい。吉田貝塚では, 縄文中期の阿高式土器に伴って櫛目文土器が出土しているが, この出土した土層からは夜臼式土器や弥生式土器片の混入も報告されている。ヌカシ遺跡では, 阿高式土器に伴って櫛目文土器が出土している。佐賀貝塚は, 縄文中期から後期の集落跡で, 発掘調査後に櫛目文土器が1点発見されているが, 時期および共伴土器については不明である。同様に木坂海神神社遺跡でも櫛目文土器が中世の遺物に混在して出土している。

以上のような出土状況から見ると, 夫婦石遺跡が縄文前期末から中期, ヌカシ遺跡は縄文中期, その他は明確ではないようだ。

### 遺跡の時期について

本遺跡では, 第Ⅶ層, 第Ⅵ層, 第Ⅲa層から第Ⅲd層の3層に遺物包含層が確認され, それぞれ, C調査区下層, 同上層, B調査区第Ⅲ層の3つの文化層として捉えられる。

時期については, C調査区下層や同上層の文化層は櫛目文土器の単純層で, 縄文前期末頃に朝鮮半島から搬入したものと考えられる。また, 遺跡の分布範囲内で海岸部分の堀削工事中に, 阿高式土器(第9図30~32)が採取されていることや, B調査区第Ⅲ層に櫛目文土器群に混って阿高式土器片が1点出土していることから, 縄文中期の時期まで生活が営まれていたと考えられる。

註1 鄭 澄元・林 孝澤・申 敬澈 『金海水佳里貝塚Ⅰ』 釜山大学校博物館遺跡調査報告4 1981

註2 鎮西町教育委員会 「赤松海岸遺跡」 鎮西町教育委員会 1989

註3 坂田邦洋 「対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究」 1978

註4 西 健一朗 「西加藤遺跡」『対馬』浅茅湾とその周辺の考古学調査 長崎県教育委員会 1974

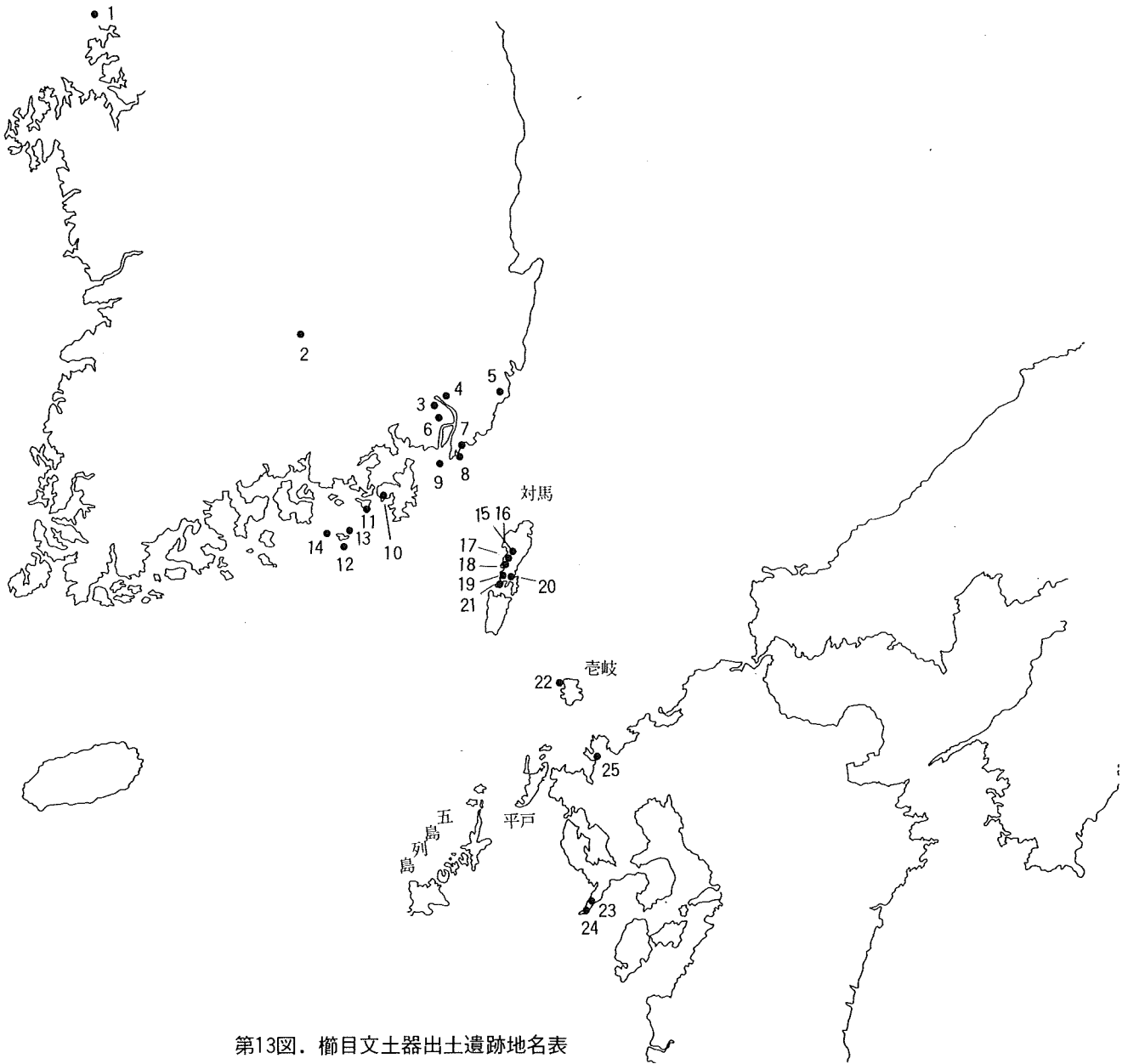
註5 坂田邦洋 「吉田貝塚」『対馬の遺跡』 長崎県文化財調査報告書第20集 長崎県教育委員会 1975

註6 正林 護 「対馬佐賀貝塚の調査報告 補遺」 九州考古学第64号 1989

註7 坂田邦洋 「対馬ヌカシに於ける縄文時代中期文化」 昭和堂印刷出版事業部 1978

註8 坂田邦洋 「志多留貝塚」『対馬の考古学』 縄文文化研究会 1976

註9 島津義昭 「日韓の文物交流」季刊考古学 第38号 雄山閣 1992



第13図．櫛目文土器出土遺跡地名表

- |           |             |                         |          |
|-----------|-------------|-------------------------|----------|
| 1 鳥耳島貝塚   | 2 鳳溪里遺跡     | 3 金谷洞栗里貝塚               | 4 府院洞貝塚  |
| 5 新岩里遺跡   | 6 金海水佳里貝塚   | 7 東三洞貝塚                 | 8 瀛仙洞貝塚  |
| 9 多大浦貝塚   | 10 山達島      | 11 烟台島                  | 12 欲知島貝塚 |
| 13 下老大島貝塚 | 14 上老大島山登   | 15・16 越高・越高尾崎遺跡 (越高浜遺跡) |          |
| 17 夫婦石遺跡  | 18 木坂海神神社遺跡 | 19 吉田貝塚                 | 20 佐賀貝塚  |
| 21 ヌカシ遺跡  | 22 松崎遺跡     | 23 深堀遺跡                 | 24 脇岬遺跡  |
| 25 赤松海岸遺跡 |             |                         |          |

参考文献

- 金 廷鶴・鄭 澄元 「金谷栗里貝塚一岩陰住居遺跡」 釜山大学校博物館遺跡調査報告 3 1980
- 国立中央博物館 『新岩里』 I 国立中央博物館古跡調査報告第20集 1988
- 国立中央博物館 『新岩里』 II 国立中央博物館古跡調査報告第21集 1989
- 国立晋州博物館 『欲知島』 国立晋州博物館遺跡調査報告書第3集 1989
- 沈 奉謹 『陝川鳳溪里遺跡』 古跡調査報告書第15冊 東亜大学校 1989
- 金 東鎬 「上老大島」 東亜大学校博物館 1984
- 中山清隆 「韓国南部の新石器文化と北部九州の縄文文化」 『考古学の世界』 1989
- 島津義昭 「日韓の文物交流」 『季刊考古学』 第38号 雄山閣 1992
- 鄭 澄元・鄭 漢徳 「韓国島嶼地域の遺跡」 『季刊考古学』 第38号 雄山閣 1992
- 水ノ江和同 「曾畑式土器の出現」 古代学研究 117 1989
- 水ノ江和同 「曾畑式土器の成立」 『季刊考古学』 第38号 雄山閣 1992
- 広瀬雄一 「韓国南岸地域の櫛目文土器の研究」 『考古学の世界』 3 1984
- 「櫛目文土器前期の研究」 『伽!通信』 13・14 1985
- 「韓国隆起土器の系譜と年代」 『異貌』 12 1986
- 「韓国嶺南地方櫛目文土器前期の土器変遷」 『考古学の世界』 1989
- 「韓国南部地方櫛目文後期の変遷」 九州考古学, 63 1989
- 「韓国櫛目文土器の編年」 『季刊考古学』 第38号 雄山閣 1992
- 小原 哲 「韓国隆起土器の検討」 『伽!通信』 13・14 1985
- 「朝鮮櫛目文土器の変遷」 『東アジアの考古と歴史』 上 1987
- 「韓国櫛目文土器の編年」 『季刊考古学』 第38号 雄山閣 1992
- 鎮西町教育委員会 「赤松海岸遺跡」 - 昭和62・63年度名護屋漁港海岸保全施設整備事業に係わる発掘調査概要報告書 - 鎮西町教育委員会 1989

# 版 図



図版. 1



遺跡遠景（八幡神社の鳥居の先付近一帯）

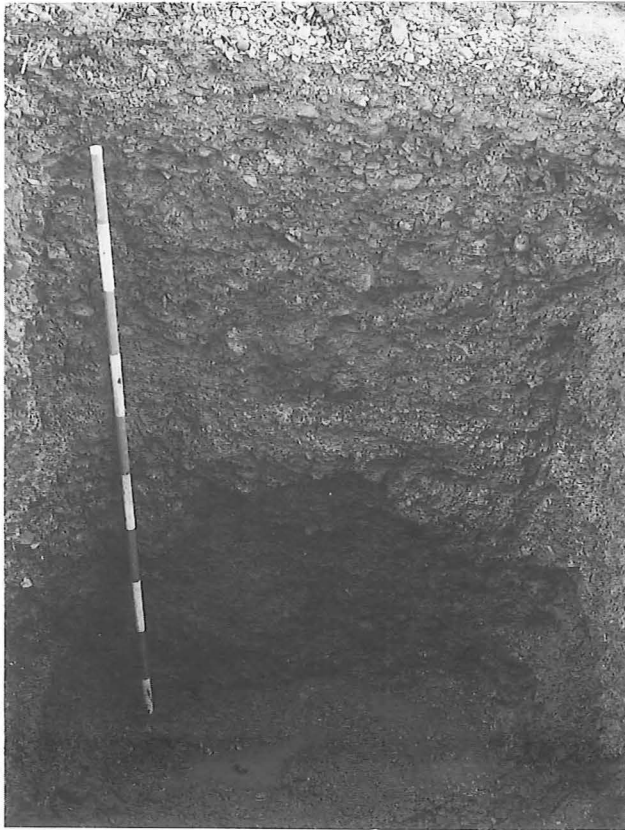


鹿見湾奥部



遺跡近景

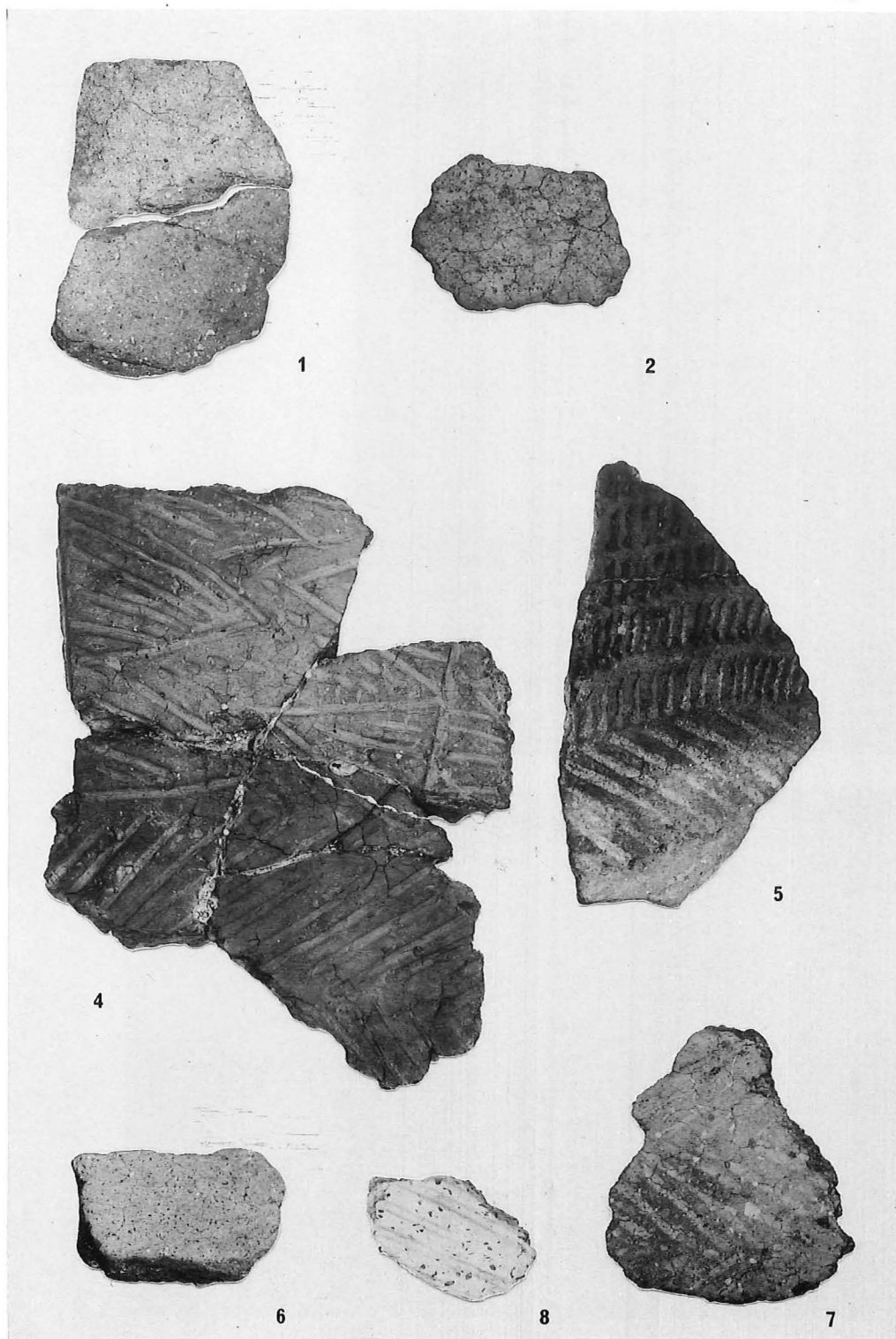
図版. 3



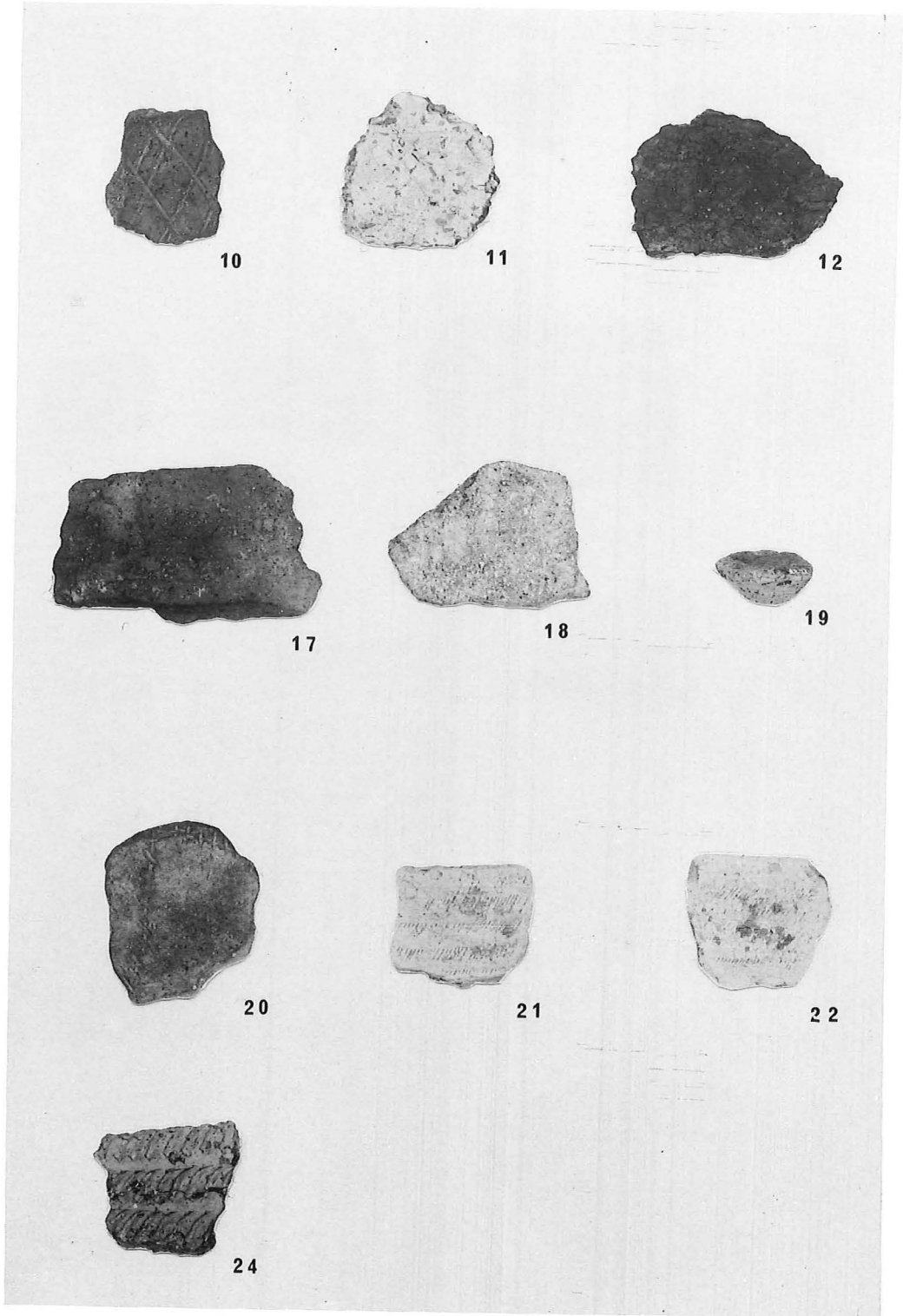
C 調査区土層写真



B 調査区第Ⅲ a ~ Ⅲ d 層遺物出土状況写真

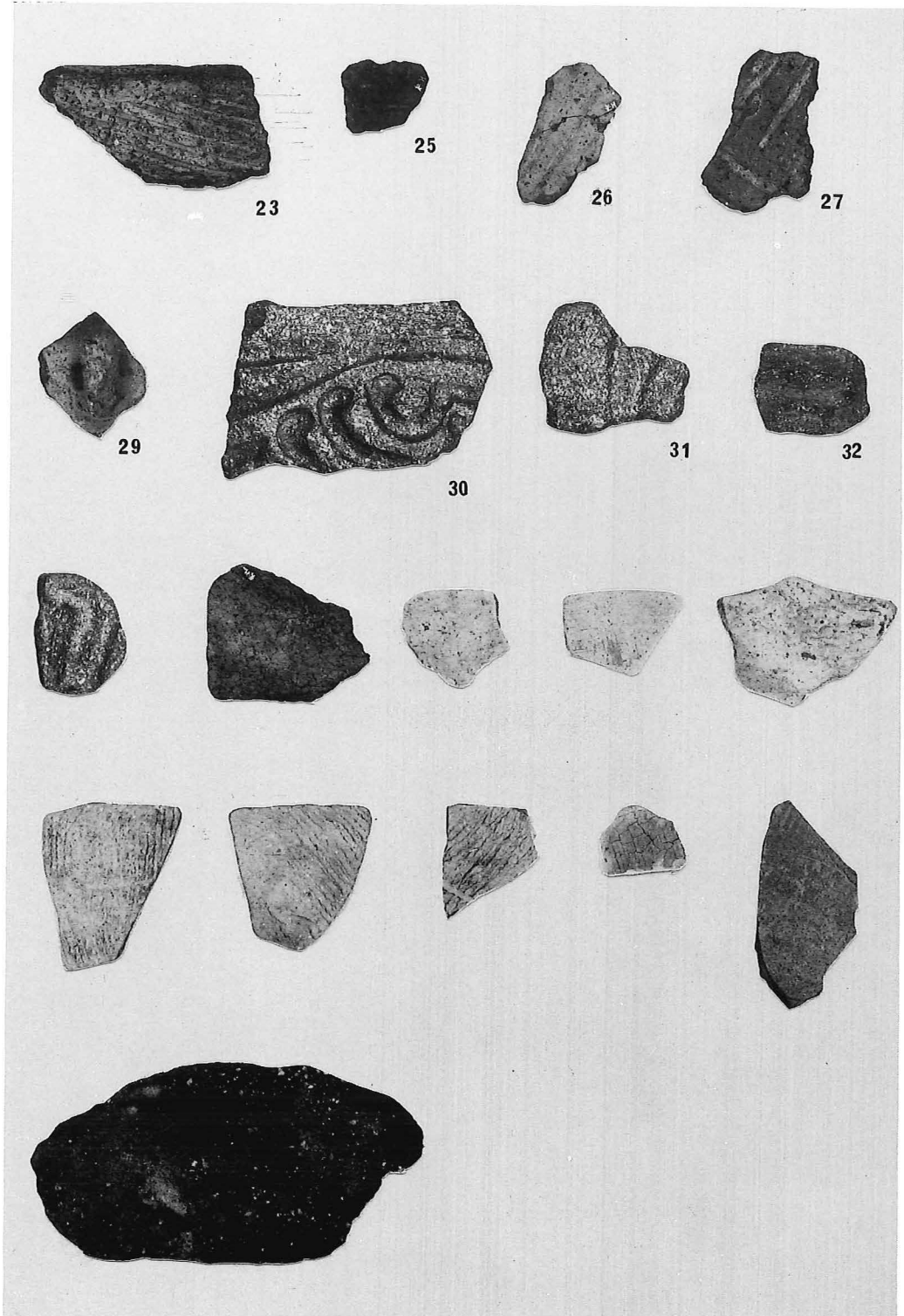


C調査区 (第Ⅶ層・第Ⅵ層) 出土土器



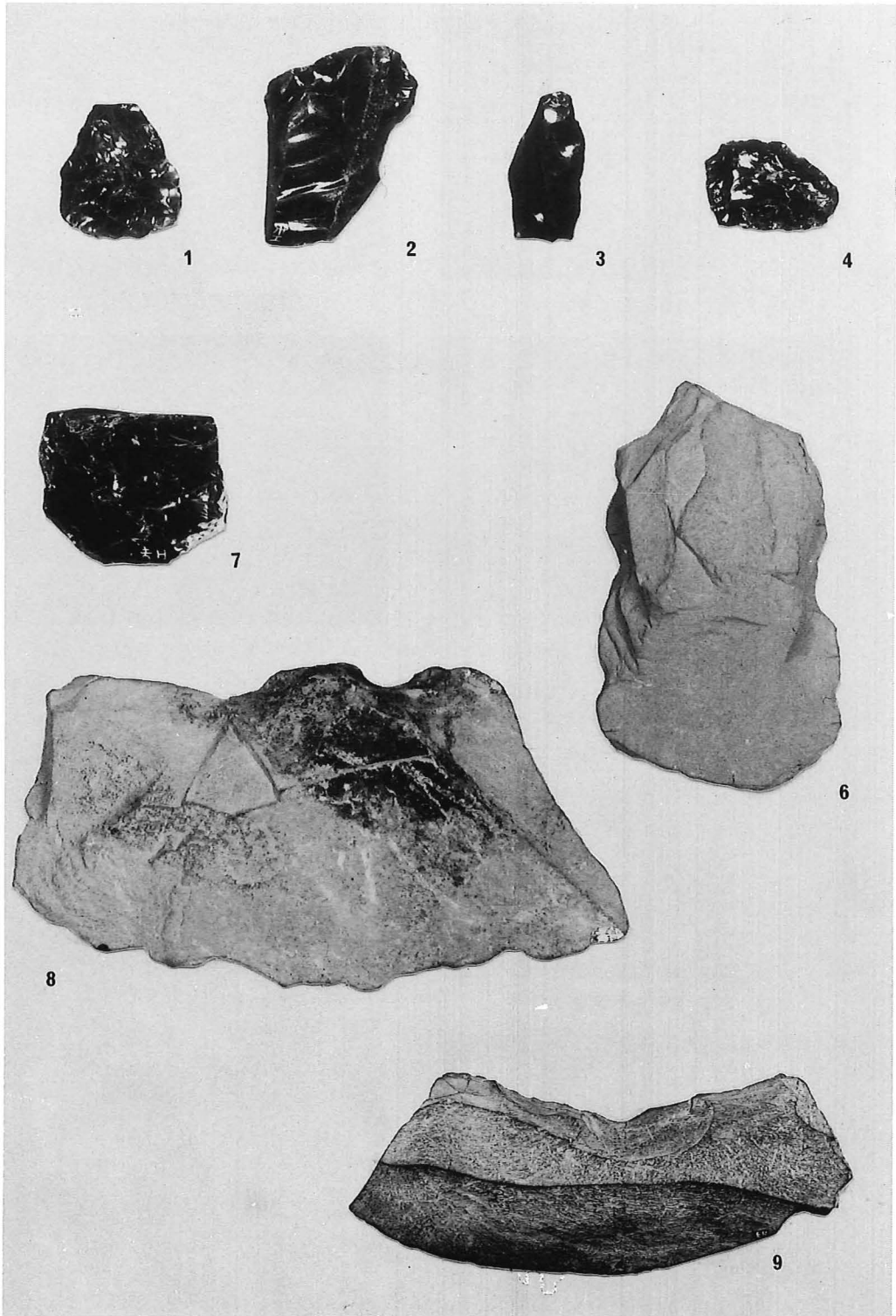
B調査区（第IV層）出土土器，表土・表採資料





表土・表採資料

図版. 7



B調査区（第Ⅲ層）出土石器，表土・表採資料



調査風景 (遺跡の北側より)



調査風景 (南側より)



調査風景 (遺跡の南側より)



調査風景 (遺跡の南側より)



調査風景 (遺跡の南側より)



鹿見湾を望む



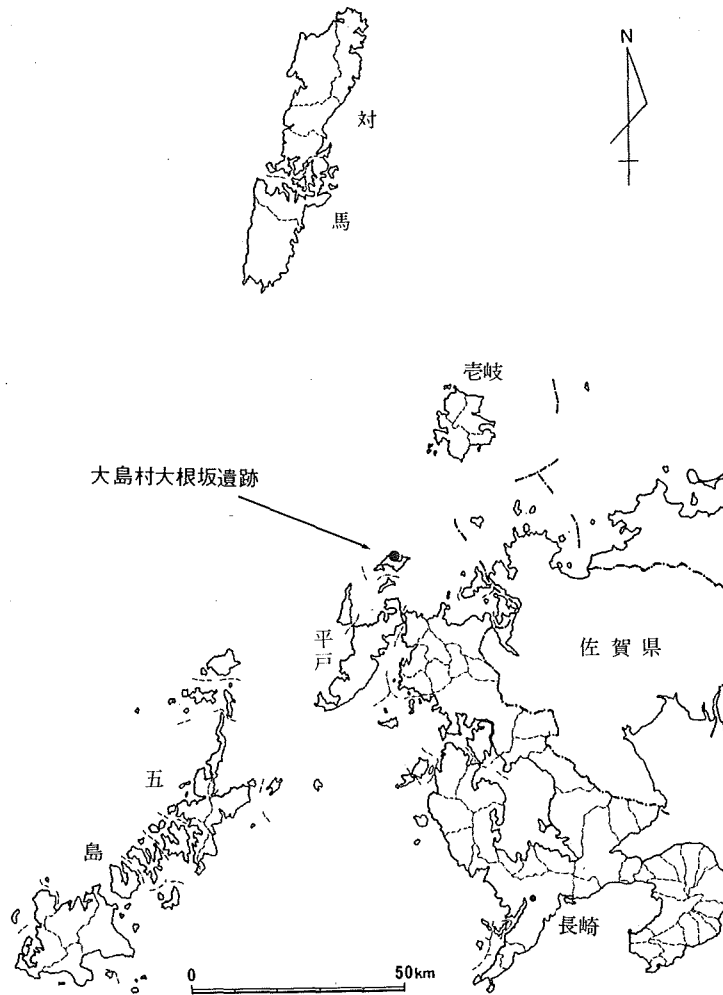
調査風景 (南側より)

調査風景・鹿見湾奥部



## Ⅱ 大根坂遺跡

—北松浦郡大島村所在—



## 例 言

1. 本報告は、平成2年度に実施した、長崎県北松浦郡大島村大根坂免字大原に所在する大根坂遺跡の試掘調査報告書である。
2. 調査は、大島村教育委員会が調査主体となり、長崎県教育庁文化課が調査を担当した。
3. 調査関係者は以下のとおりである。(平成2年度時)  
大島村教育委員会 教 育 長 井崎 照美  
社会教育係長 米村 悟則  
長崎県教育庁文化課 文化財保護主事 村川 逸朗
4. 調査時の写真撮影及び遺物写真は村川による。
5. 本書の執筆及び編集は、村川による。
6. 本書関係の遺物は、現在長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。

## 本文目次

I 調査に至る経緯	43
II 遺跡の立地と歴史的環境	43
III 調査	50
IV 土層	53
V 遺物	53
VI まとめ	60

## 挿図目次

第1図. 大島村遺跡地図	45・46
第2図. 大島村の旧石器資料	48
第3図. 勝負田古墳出土遺物及び前平古墳遺跡現状図・同古墳出土遺物	49
第4図. 大根坂遺跡調査試掘壕配置図及び周辺地形図 (1/2,500)	51・52
第5図. 大根坂遺跡 (T P 14) 遺構図 1/50	54
第6図. 大根坂遺跡出土の土器 (T P 17, 3層) ① 1/3	55
第7図. 大根坂遺跡出土の土器 (T P 17, 3層) ② 1/3	57
第8図. 大根坂遺跡出土の土器 (T P 17, 3層) ③ 1/3	58
第9図. 大根坂遺跡出土及び表面採集の石器2/3	59

## 表目次

表. 1 大根坂遺跡出土及び表面採集遺物内訳	53
------------------------	----

## 図 版 目 次

図版. 1	大根坂遺跡遠景	63
図版. 2	大根坂遺跡 T P 17 遺物・遺構出土状況	64
図版. 3	大根坂遺跡調査状況	65
図版. 4	大根坂遺跡 (T P 17・3層) 出土の土器 (1/2)	66
図版. 5	大根坂遺跡 (T P 17・3層) 出土の土器と大型獣骨 (シカ) (1/2)	67
図版. 6	大根坂遺跡出土及び表面採集の石器 (1/1)	68
図版. 7	城ノ辻の遠景及び不明遺構	69
図版. 8	城ノ辻と江古ノ辻他の近景	70

## I 調査の至る経緯

平成3年度農政課関係の農業基盤整備事業計画で、大島村大原地区では当該事業（区画整理事業）の区域内に周知の遺跡である大根坂遺跡が含まれており、平成2年12月3日から12月8日までの6日間、試掘調査を実施した。その結果、2ヶ所の試掘坑から柱穴や不明土壌等の遺構や、丹塗土器や獣骨等の遺物集中箇所を確認した。

この結果をもって農政課と協議を行い、保存状況の良い遺跡の中心部は設計変更により現状保存されることとなった。

## II 遺跡の立地と歴史的環境

大島村は、壱岐水道の西方、平戸島の北方に浮かぶの山大島にあり、玄武岩からなる台地上に立地している。大根坂遺跡は、縄文時代から古墳時代にいたる遺跡として周知されている（第1図23）。位置としては江古ノ辻の北東部、急傾斜をもって海へ没するその中腹に開けた緩傾斜地にある。北北東には海を隔てて壱岐島があり、条件が良い日には北北西の方向に意外な近さで対馬を望むことができる。

周辺の遺跡としては、縄文時代の散布地である仏法地遺跡・水ノ元遺跡（第1図22, 25）、旧石器時代から縄文時代の散布地である菰蓋池遺跡・白岩池遺跡・轟第1池遺跡・轟第2池遺跡（同図, 24・26・27・28）等があり、旧石器時代から縄文時代の遺跡に恵まれている。

弥生時代の遺跡は、当該の大根坂遺跡以外では現在のところ長畑馬場遺跡ぐらいしか知られていないが、今後の発見に期待した。

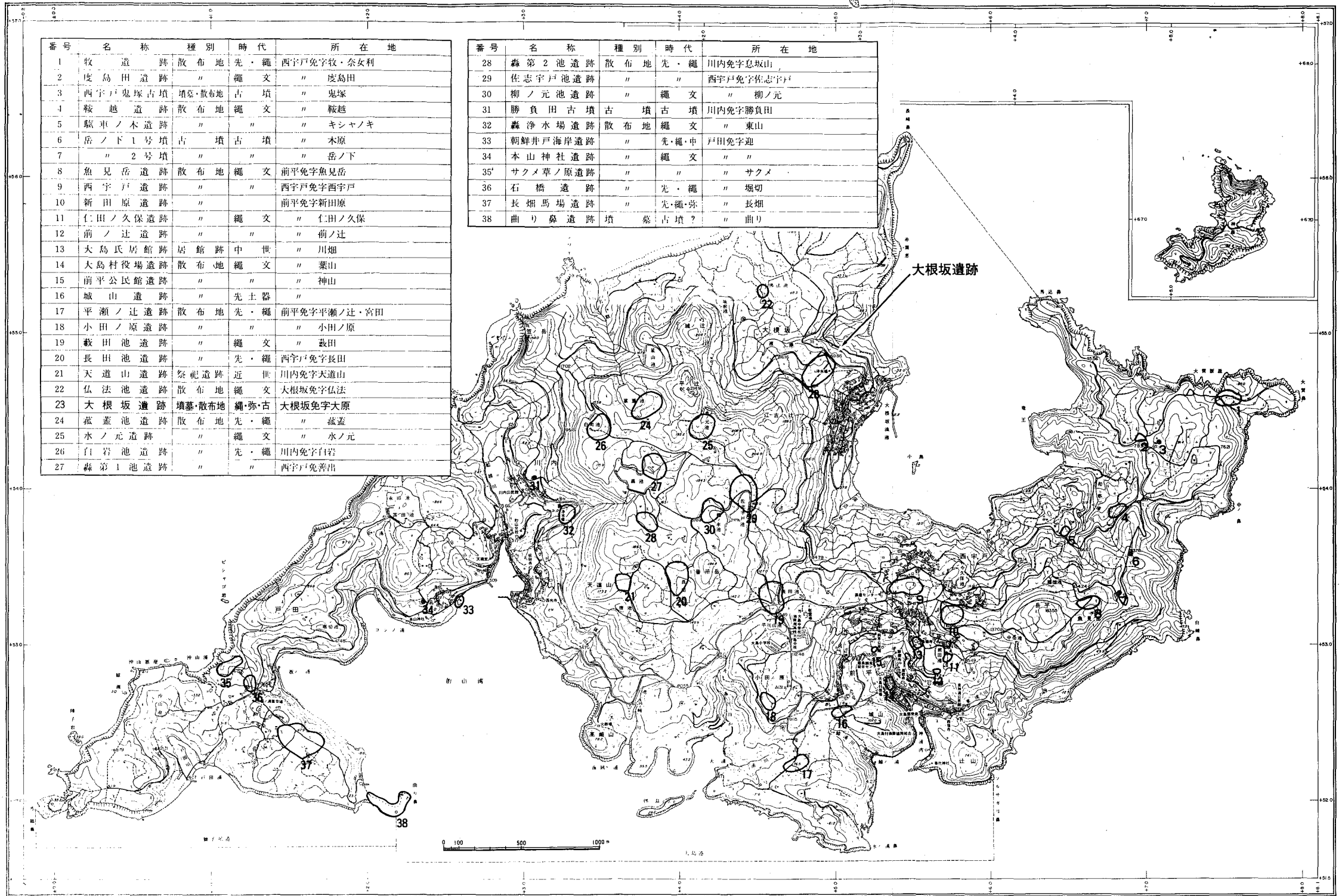
古墳時代では、昭和25年に京都大学平戸学術調査団によって調査された的山浦川内免勝負田古墳、西宇戸免岳ノ下2号墳等を始めとして、昭和57年の採石により損壊した岳ノ下1号墳、戸田免字曲りの海に突出した砂嘴上にある曲り鼻遺跡（現地表面を観察しただけでも2、3基の埋葬址を確認できる）、発掘調査がなされていないので、古墳かどうかまだはっきりとした確証はないものの西宇戸鬼塚古墳等がある。

島の中央部には古代祭祀遺跡（岩境）である山の神遺跡がある。また、「肥前国風土記」にある「大家島」は当地という説があり（肥前風土記新孝・県の歴史）、前平には「千人塚」と称する石積みの墳墓が2基現存しており、元寇の時の戦死者の遺骸を合葬したものといわれている（平戸之光20）。元寇以後、当地の大島氏は城山に築城を試み幅8間の道路工事に着手したらしいが、完成に至らなかった。

文献にみる大島氏の動向としては、貞応3年（1224年）4月14日の関東下知状写に「肥前国宇野御厨内保々木・紐差・池浦・大島地頭職」と見え、当地の地頭職が大江通頼に安堵されている（武雄市教育委員会所蔵感状写／西南地域史2）。また、文永7年（1270年）9月15日の

沙弥乙啓奉書には「肥前国御家人大島次郎通綱子息又次郎通清同舎弟地蔵丸申，当国宇野御厨内大島地頭職并檢非違・河海夫等本司職，任亡父讓狀，可給安堵御下文由事，申状如此」と見え，通頼の所領の一部の大島地頭職・檢非違・河海夫等本司職は通綱に処分され，さらにその子通清・地蔵丸に伝えられたとみられる（来島文書／鎌遺10693）。大島又次郎通清はモンゴル合戦に参加しており，弘安6年（1283年）3月22日の肥前国守護北条時定書下に見える（山代文書／佐賀県資料集成15）。また，モンゴル合戦の後，大島にはモンゴル船の来襲に備え，狼煙場が設置された。永仁2年（1294年）3月6日の大島又次郎宛の肥前国守護北条定宗鎮西御教書には「とふたの事，越後国司（北条兼時）御奉書案文如此，如状者，三月廿六日午尅可立之旨，被仰筑前国畢，肥前国分同時可立繼之由，可相島々在所，若其日雨ふらハ，同廿七日可立之云々，壱岐島より始て，島々高き所ニ火を可被立之間，大島ニハ壱岐島の煙を守て，その時をたかへす，たき・多とりつみて，あまたたくへき也，たかいに火のひかり煙を守てたかるへし，大島の火を見てたかしま（鷹島）にたきつくへき由，被相触畢，異国用心御大事也，更々不可有緩怠之儀候」と見える（来島文書／鎌遺18499）。大島は壱岐からの連絡を受け，鷹島へ烽火で知らせる中継点となっていた。また，この来島文書を読んでみて，「たがいに火のひかり煙を守てたかるべし」というくだりから，大島に設けられた狼煙場が一基だけでなく，少なくとも二基は設けられていた事が読みとれないこともない。そして，昭和31年2月，大島村教育委員会発行の『大島の歴史』第1部に城ノ辻と番所（ばんどころ，番岳ともいう）のことについて記してあり，城ノ辻については，「ここは昔遠見番所，即ち見張所（看視所）のあった所であると云い伝えられておりますが，その年代は全く不明で……後略」と記してあり，また番所については，これははっきりと，「文永の役後，鎌倉幕府の命によりまして，異国船，即ち外国船監視の遠見番所として，特に日本に於ける西国防備の第一線基地として重要な任務をおびた場所でございまして，明治4，5年廃止になりますまで，数百年間遠見番所の任務を果してきたところでございます」という事で，明治まで継続して使用が在続したせいから，その由緒がはっきりしており，大島又次郎宛の文書に指示してある狼煙場の一つと考えられる。城ノ辻についてはその設立の時期が不明であり，はっきりとした確証はないものの，鎌倉幕府の命により築かれた狼煙場の可能性はあるものと考えられる。その時々曇りのかかり具合や風向等の気象条件等を考えて，狼煙場を設ける場合は，一基だけでなく，二基設けられたのではなかろうか。壱岐から連絡を受け，鷹島へ烽火で知らせる場合は，壱岐からの烽火をまず城ノ辻で見とって番岳へ知らせ，番岳から鷹島へ知らせれば，その連絡はスムーズに行くと思われる。これはあくまでも可能性を考えての推測であって，これを実証する為には城ノ辻が狼煙場である事を確認し，時期を確定する必要がある事はもちろんの事である。

城ノ辻を鎌倉幕府の命により築かれた狼煙場の一つと仮定して話を進めている訳であるが，これにはひとつのきっかけがあった。そのきっかけというのは，県文化課が昭和58年から5ヶ年をかけて県内をくまなく分布調査した県内遺跡の周知事業で，昭和59年の10月16日から18日



第1図. 大島村遺跡地図

までの3日間、大島村を分布調査して踏査した。昭和59年10月17日に、大島村教育委員会の米村吾則氏の案内で、県文化課正林護、村川の3名で城ノ辻に登った訳であるが、城ノ辻の山頂で、径2.5 m程の円形に石をめぐらせたものを3基程確認した。そのうちの一つ最高所のものには、国土地理院の三角点が設置してあり、この水準点のために石囲いがしてあるのかとも考えたが(図版7)、他にも同様な石囲いがあり、これには何も設置してないところから、たまたまこの石囲いのうちの1つに水準点を設けたと考えた方が妥当かと思われた。また、この城ノ辻の中腹には累々と石塁がめぐらしてあり(図版7)、この石塁は隣の峰の江古ノ辻にもめぐらしてあった(図版8)。現在はこの石塁の内側で牛を放牧してあり、のどかに牛が草を食む光景をみた時は、牛の牧場であるとみるのが自然かとも思われた。しかし、城ノ辻の山頂の径2.5 m程の円形に石をめぐらせたものは烽火台の可能性もあるとして、城ノ辻と江古ノ辻の中腹に累々とめぐる石塁を含めて、地形測量の必要性を米村氏に話し、大島村を離れることとなった次第である。

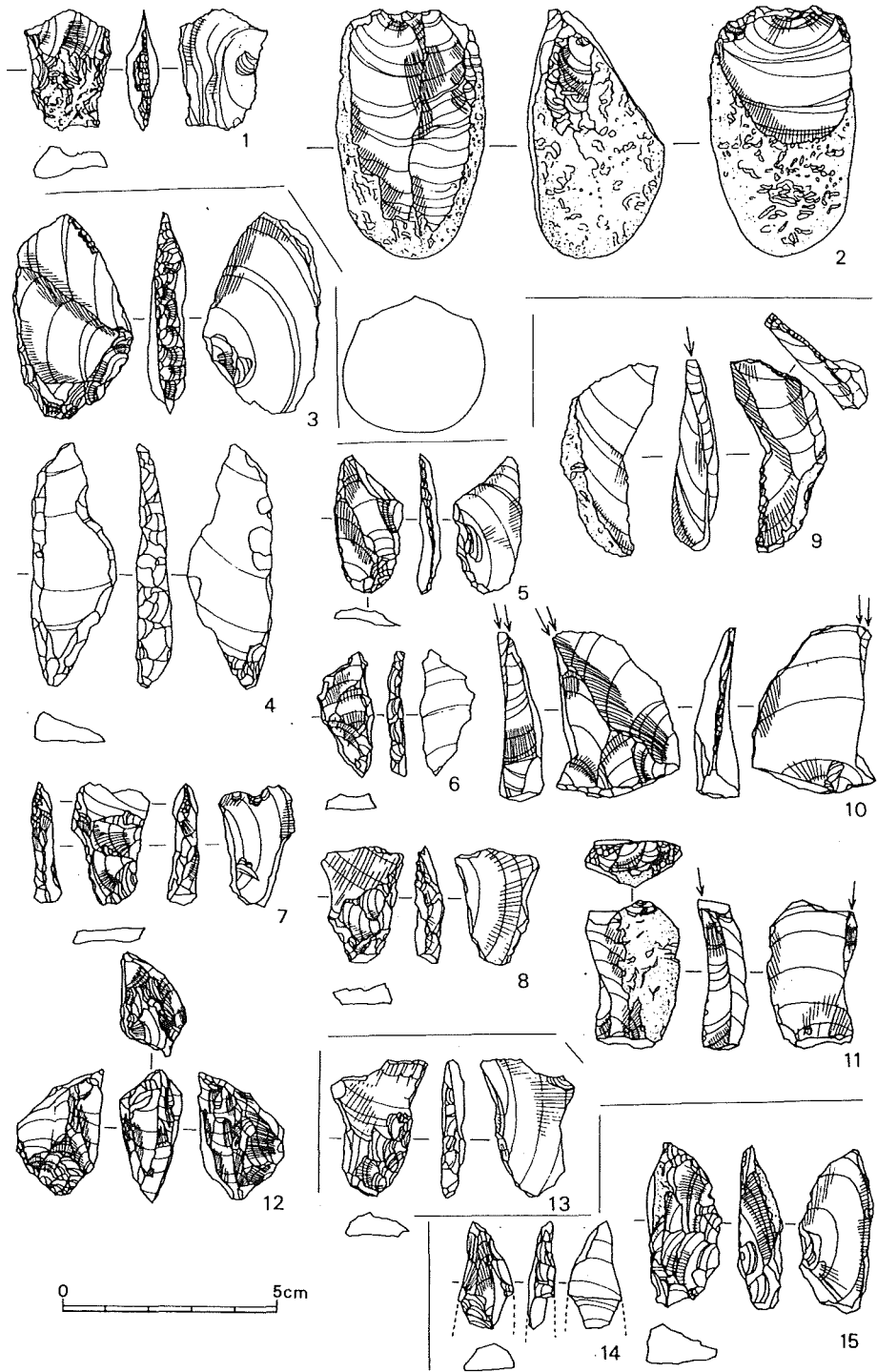
現時点では城ノ辻が烽火台であるかどうか分からない訳であるが、『城ノ辻』という地名と、北側には『城ノ前』という地名もある。また、大根坂の集落から江古ノ辻に通じる道は、『城道』と呼ばれる点(地元の人でも城へ通う道だったのではといわれる)等、地名に城関係の地名があり、否定してしまうには惜しい気がする。ここでは試みに「元寇史の空白」へのアプローチのひとつとして、この城ノ辻を元寇防備の為に大島氏が設営した最前線基地として考えてみたい地理的位置ではある。

また、大島村には県指定無形民俗文化財の『大島のジャンガラ』、『大島の須古踊』等があり、中世芸能、古い盆行事の残在を見ることができ、中世の歴史的な風土を残している。

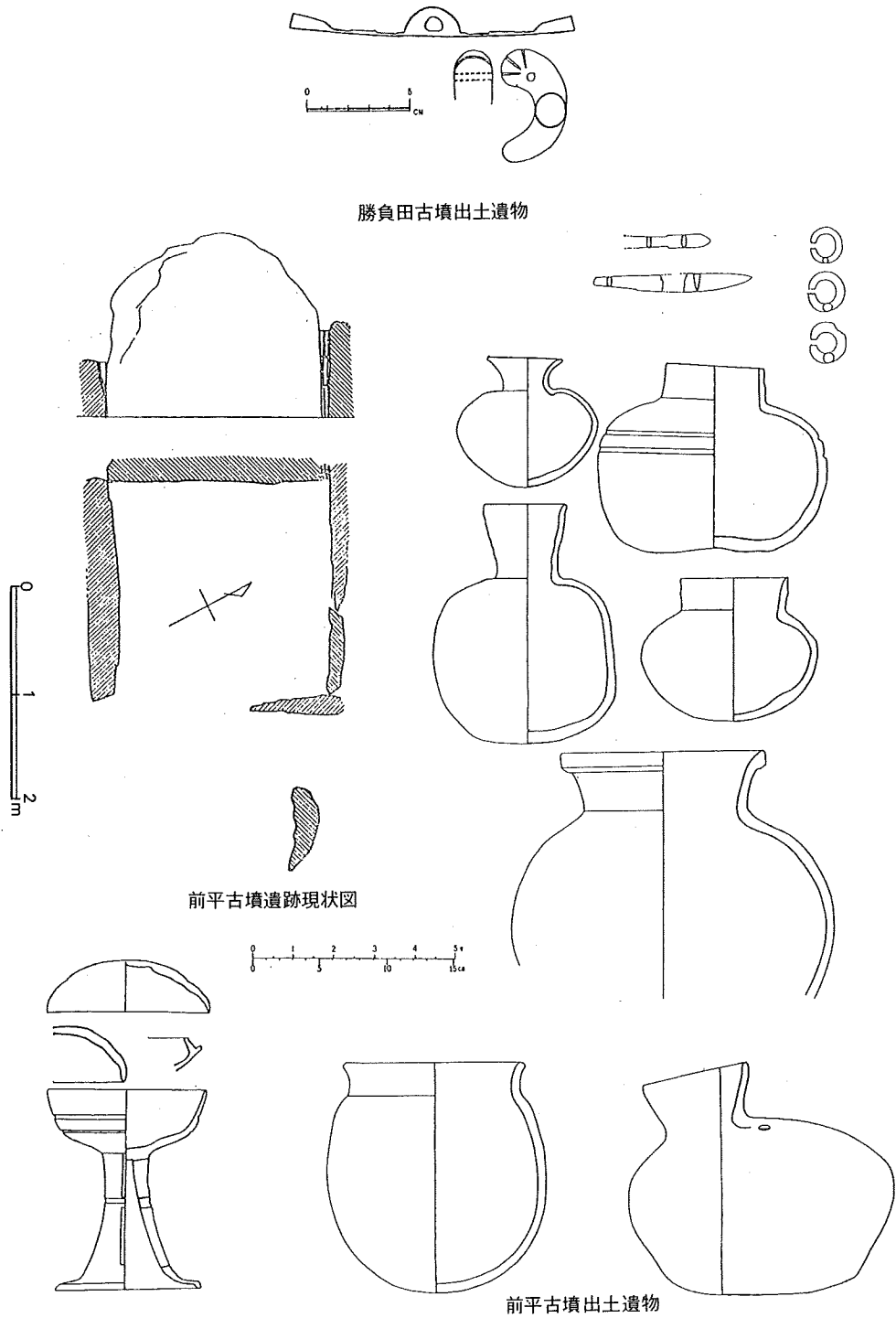
#### 〔参考文献〕

- 『角川日本地名大辞典』 42 長崎県 角川書店
- 『長崎県の文化財』 長崎県教育委員会
- 『平戸学術調査報告』 京都大学平戸学術調査団 1950
- 『大島乃歴史』 第一部、大島村教育委員会 昭和31年2月





第2図. 大島村の旧石器資料 1・2城山遺跡 3~12長田池遺跡 13柳の本遺跡  
14・15菰蓋池遺跡 (下川達弥「長崎県北松浦郡大島村の考古遺跡」『長崎県  
北松浦地方の文化』1985年3月長崎県立美術館より転載)



第3図. 勝負田古墳出土遺物及び前平古墳遺跡現状図・同古墳出土遺物  
(『平戸学術調査報告』1950 京都大学平戸学術調査団より転載)

### Ⅲ 調査

調査は、まず、地元の人の信仰の対象となっている巨石がある水田から順次試掘壙を設けて進めた。(着手した順番にTP番号を付している。計18箇所、第4図参照)

その概略は以下の通りである。

TP 1～4. 15

試錘棒(ボーリングステッキ)に、反応があった所に設けた試掘壙であるが、いずれも地表から40cmで地山になり、反応があったものも地山に貼りついた自然石であった。この巨石の回りには5箇所の試掘壙を設けて調査したが、いずれも、石棺及び石棺材の抜き取り跡等の遺構らしきものは確認できなかった。

TP 5. 6. 7. 18

南東部の溜池の周辺に設定した試掘壙である。いずれも1m程の客土があり、急傾斜地に石垣を築いて水田を造成したことが判明した。ただ、TP 5からは、その客土中から弥生時代前期の甕の破片が出土したが、摩滅しており、東側の山手から流れこんだものと思われる。

TP 8. 9. 10

これらの試掘壙の周辺では黒曜石の剥片等が表面採集できるものの、掘り下げてみると耕作土の下は地山で、遺物の包含層は耕作により攪乱され、それが地表面に浮き出ているものと判断された。(TP 10の土層写真参照)

TP 11. 12. 13

なだらかな地形上に位置する浄水場の東側にある作業道の切り通し面には、石棺が現在も残存している為、これらの試掘壙を設定したが、石棺及び棺材等は発見できなかった。(地主の話によると、50年程前に細長い形の石棺が数十基並んでいたが、耕作する時に鋤の邪魔になるので石棺を抜き取ったということであった)

TP 14

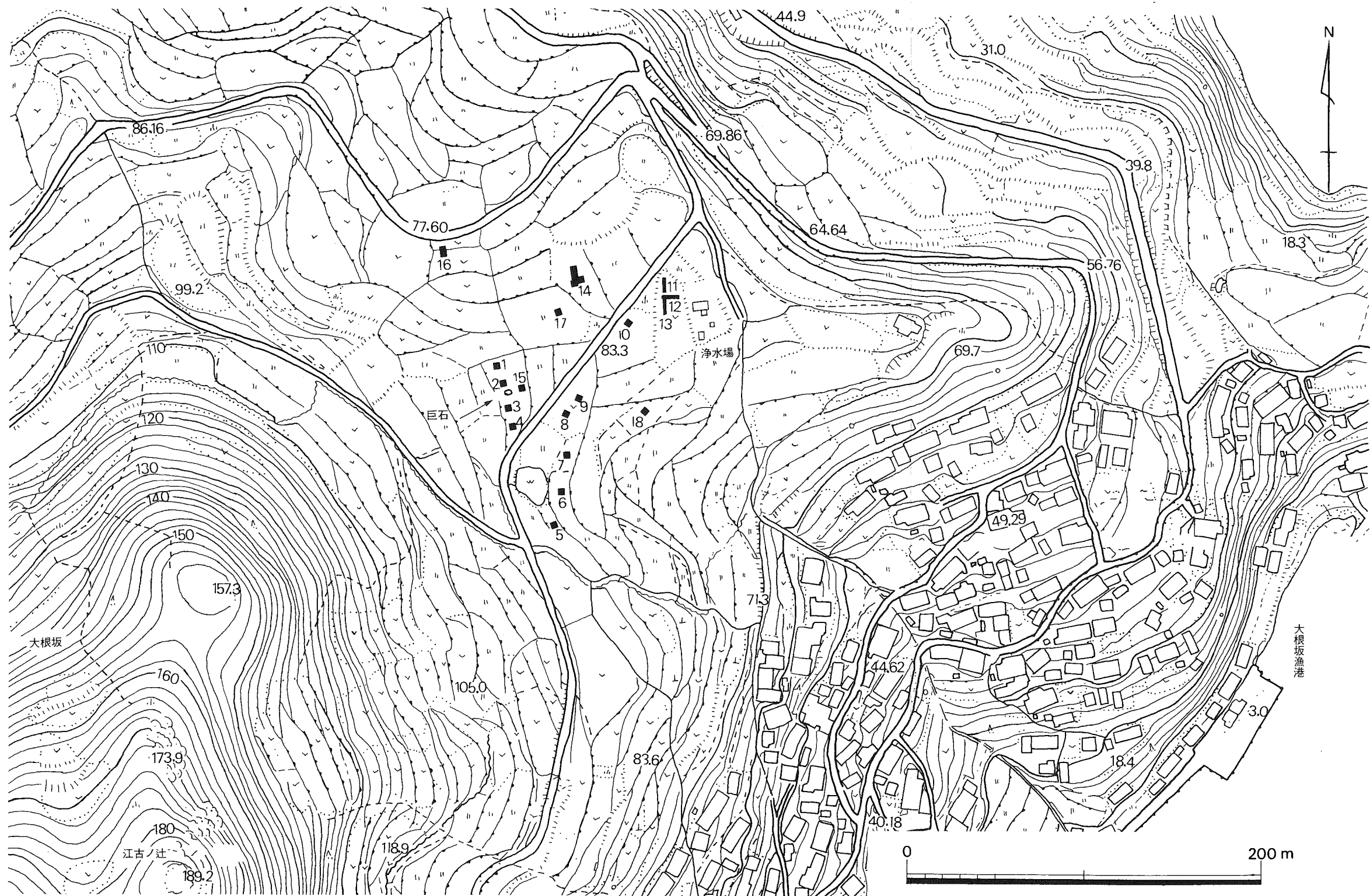
試掘壙を設定した水田は、事前の聞き取りでは人力で造成したとのことであったので、遺構が残存しているのではないかと期待して試掘に臨んだが、やはり地山面を掘り込んだピット(柱穴)が検出された。このピット中からは弥生時代中期の土器が出土したところから当該期の建物跡であろう。なお、このピットの近くから不明土壙も検出されている。30㎡に拡張。(第5図参照)

TP 16

1m程の客土があり、その中から弥生時代の土器と石器が採集されるものの、包含層は残存しない。6㎡に拡張。

TP 17

第3層の黒色土層から、非常に保存状態の良い弥生土器(弥生時代の中期末～後期初頭)が



第4図. 大根坂遺跡調査試掘坑配置図及び周辺地形図 (1/2,500)

集中して出土した。中には丹塗りの甕や壺<sup>註1</sup>、やや大形の獣骨(シカ)も出土している。また、4層の地山面を掘り込んでピットが3個検出され、その中の2個は深さも20cm程掘り下げていてしっかりしているところから住居跡の可能性も考えられる。6㎡に拡張。

なお、水田中の巨石については、地元民の信仰の対象となっており、工事を行わないとのことで調査していない。

註1 大分市歴史資料館館長 木村幾太郎氏御教示。

## IV 土層

弥生時代の遺物包含層が良好な状態で残存していたTP17の土層を示すと以下のようになる。

- 1層……………表土層(畑の耕土)
- 2層……………暗褐色土層(弥生時代の包含層, 約30cm)
- 3層……………黒色土層(保存状態が良好な弥生時代の包含層, 約10cm)
- 4層……………赤褐色粘質土層(地山)

なお、TP14では3層の黒色土層がなく、4層は赤褐色粘質土層(地山)となる。水田の造成の時に黒色土層は削平されたものと思われる。

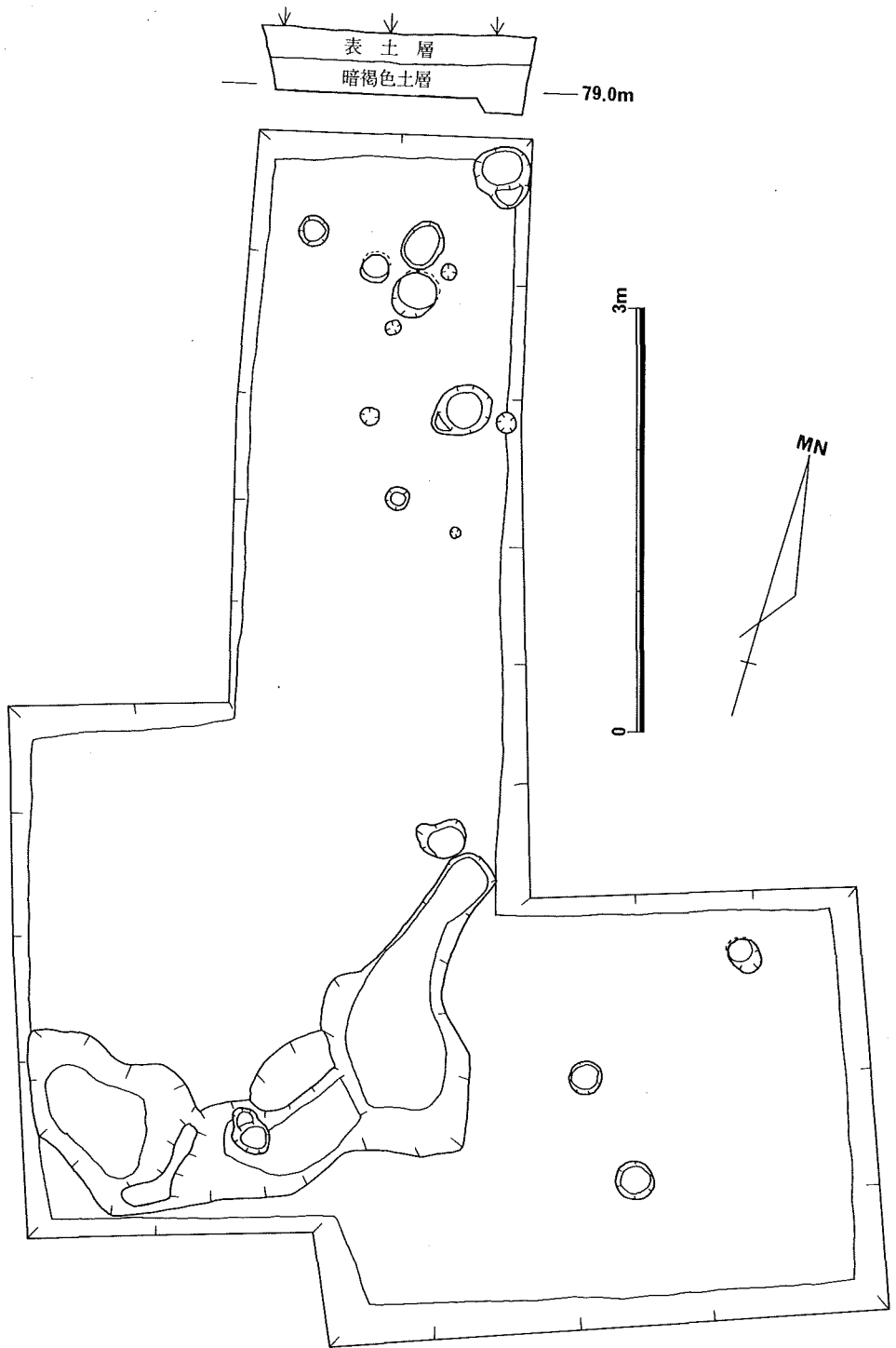
## V 遺物

TP5の客土中から出土した弥生時代前期の甕を始まりとして、TP14のピット中から出土した弥生時代中期の土器、そして、TP17の第3層である。プライマリーな黒色土層から出土した弥生時代中期末～後期初頭の丹塗りの甕や壺等がある。石器では、例えば土器の保存状態が良好なTP17に於いては黒曜石製の剥片を4点を検出したぐらいで他の試掘堀でも似たような状況である。表面採集資料である石鏃と石核、およびTP14から出土した安山岩製の剥片、石斧を図示している。出土の内訳としては下表のようになる。下表の出土点数でみるとわからないが、TP17以外の試掘堀の出土土器は小破片が多く図示できる資料は全んどないので、TP17・3層出土の資料をみていきたい。

### 1 土器

第1表 大根坂遺跡出土遺物及び表面採取遺物内訳点数

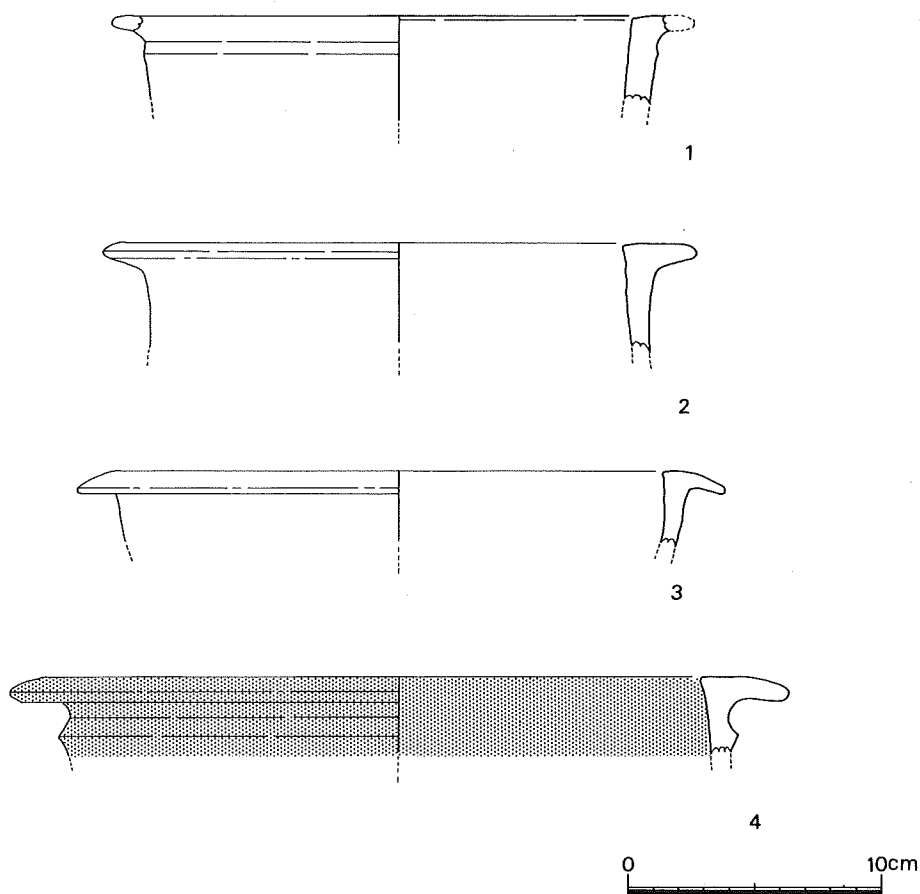
	TP5	TP10 1層(耕土)	TP14		TP16	TP17 3層	表面 採取	計
			2層	ピット中				
土器	1	1	15	63	25	29	72	206
石器 (黒曜石 TOOL等)	0	0	4	4 (うち砥石2)	6	4	21 (うち石斧1)	39
計	1	1	19	67	31	33	93	245



第5図. 大根坂遺跡 (TP14) 遺構図 (1/50)

1～4ともに甕形土器の口縁部である。1は、胴部上部に直角に近く外方に折れる口縁部がつくものと思われるが、口縁端が欠失している。外面は横方向へナデで仕上げている。内面は淡い茶褐色、外面は黒褐色を呈する。胎土に砂粒を微量含む。焼成堅致。2も、胴部上部に直角に外方に折れる口縁部がつく、表面が摩滅しているので調整痕などわからない。砂粒を含む。3は、胴上部から直角以上に折れて、やや下がり気味に外方に伸び、先端を丸くおさめた口唇部に続く。口縁部の折り目も、内側にわずかに引き出している。内外面ともナデで仕上げている。焼成堅致。砂粒含む。内面黒褐色、外面灰褐色。4は、内外面ともに丹を塗っている。3と同じように、胴上部から直角以上に折れて、やや下がり気味に外方に伸び、先端を丸くおさめた口唇部に続く。内外面とも横ナデで丁寧に仕上げている。砂粒をわずかに含む。1～4の資料は時期的には、1、2は弥生時代<sup>註1</sup>中期中葉、3、4は弥生時代中期後半の資料である。

5は、丹塗りの袋状口縁壺である。外側にのみ丹を塗っている。焼成堅致、砂粒を含む。内側口縁部はやや角度を持って立ち上がり、内側の屈曲部には稜線が入る。頸部に三角凸帯がある。口径14.4cm。6は、同じく丹塗りの鋤先状口縁壺である。内外両面に丹を塗っている。砂



第6図. 大根坂遺跡出土の土器 (TP17・3層) ① (1/3)

粒を含み、焼成堅致である。器壁が厚く、頸部に「M字」突帯が付き、口唇部にはキザミがつく。丹の残りが悪く暗文があったかどうかはわからない。内面は横ナデ、外面もナデで仕上げである。7は、壺形土器の胴部片である。「M字」突帯がついている。上部端に頸部の一部分が残っているところからもう少し器壁は傾くかもしれない。内外面とも明赤褐色を呈し、砂粒を割に多く含んでいる。外面の横ナデ調整はわかる。8も同じく、「M字」突帯がつく壺形土器の胴部片である。淡黄褐色を呈し、砂粒を全んど含まない。内外面ともナデ仕上げされている。5、6の資料は、口縁部の特徴から弥生時代<sup>註2</sup>中期末～後期初頭の資料と思われる。

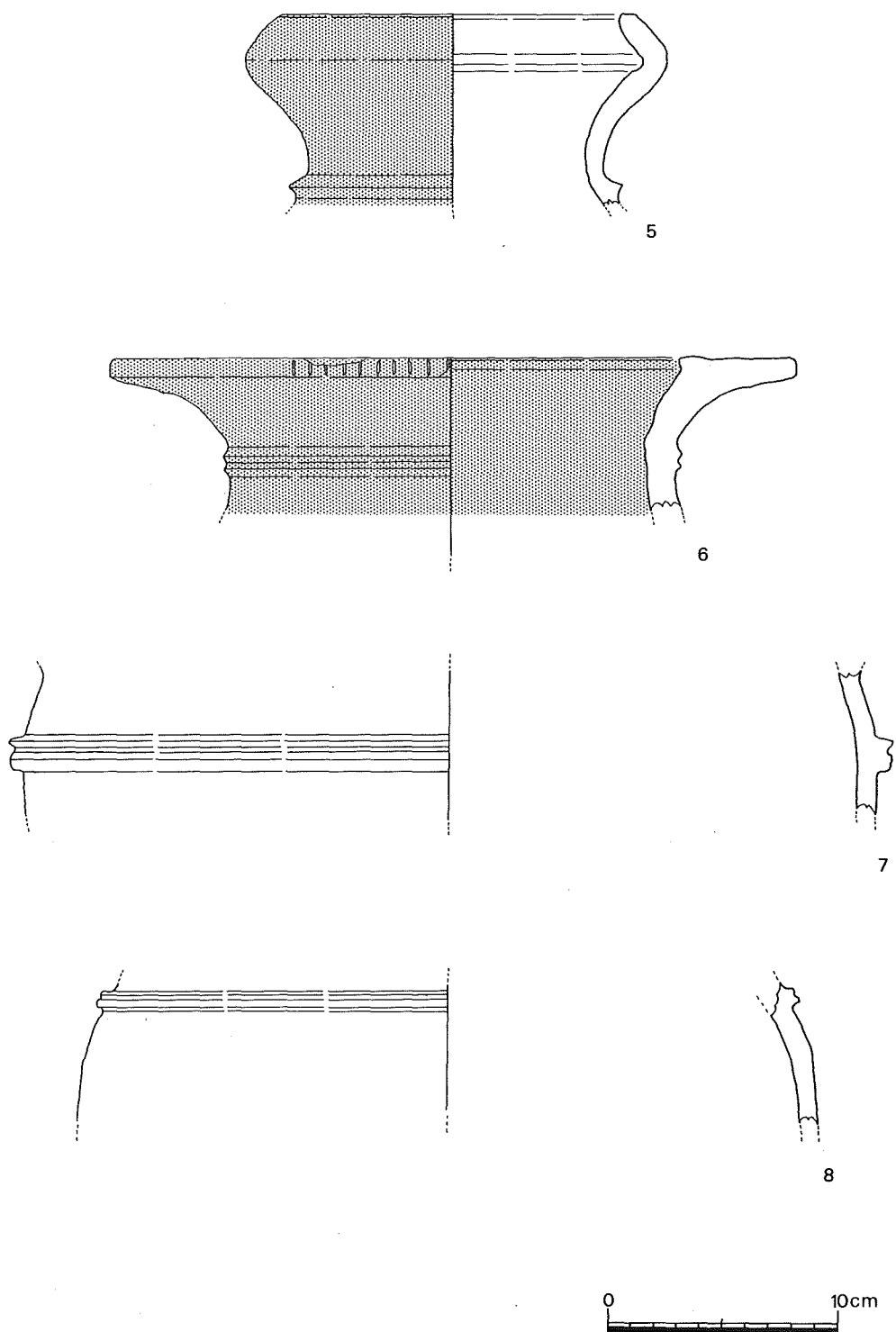
9～21は底部である。恐らく甕形土器の底部とおもわれるものが10、11、13、19で、壺形土器の底部と思われるものが9、12、14、15、16、17、18、20、21になる。

9は、壺形土器の底部と思われるものである。外面は赤褐色、内面は黒褐色を呈する。石英砂粒を多く含む。10は、甕形土器の底部片と思われる。外面は赤褐色、内面は黒褐色を呈する。石英砂粒、角セン石を含む。11は、甕形土器の底部片である。焼成良、外面は灰黒色、内面は、灰色、砂粒を少量含む。12は、壺形土器の底部片である。外面は灰赤褐色、内面は暗灰色、砂粒をかなり含む。器壁は比較的薄い。13は、甕形土器の底部片である。外面は淡赤紫色、内面は灰色である。石英砂粒を含む。14は、壺形土器の底部である。底径9.6cm、外面は赤褐色、内面は灰色を呈する。石英砂粒を少量含む。15も、壺形土器の底部片である。比較的薄手で、外面に丹を塗っている。外面は赤褐色、内面は灰黄褐色。砂粒は全んど含まず、金雲母が認められる。16も、壺形土器の底部片である。外面にタテ方向の刷毛目痕が認められる。外面は淡赤褐色、内面は黒褐色。石英砂粒を含んでいる。17も、壺形土器の底部片である。底部は赤褐色、外面は黒褐色、内面は灰黄色を呈する。砂粒を全んど含まない。若干あげ底。18も、壺形土器の底部である。底径7.0cm、外面には丹の痕跡が残っている。内面は剥落しており黒色を呈する。石英砂粒を含む。若干あげ底である。19は、甕形土器の底部である。色調は他の土器と異り、淡灰黄色を呈する。石英砂粒を含む。底部の形から弥生時代前期の資料と思われる。20は、壺形土器の底部である。外面は淡赤褐色を呈し、内面は剥落している。石英砂粒と、金雲母をごくわずかに含む。底部から上方に向かってタテ方向にナデ仕上げされている。21も、壺形土器の底部である。やや淡い赤褐色を呈し、内面は剥落している。石英砂粒を含んでいる。9～21の甕形土器や壺形土器の底部は、19の弥生時代前期の資料と思われるものの他は、先に説明をした弥生時代中期中葉から後期初頭の口縁部と対をなすものであろう。

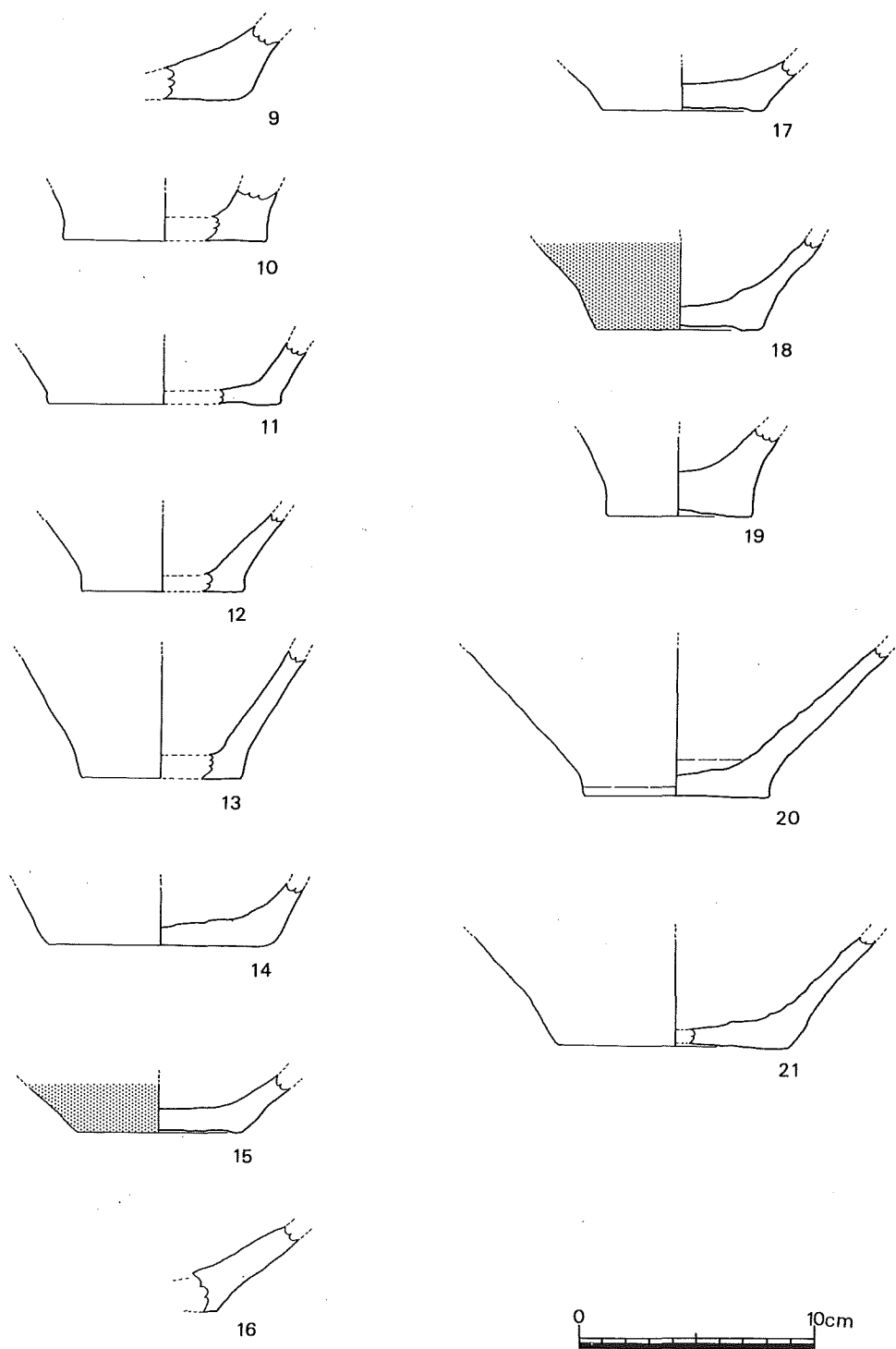
## 2 石器

1と2は黒曜石製の石鏃である。1の大きさは長さ2.6cm、幅1.42cm、厚さ0.7cmである。2は先端部、脚部ともに欠失している。1、2とも大根坂遺跡内の表面採集である。3は、安山岩製の剝片である。スクレーパー的な使用がなされたかもしれない。長さ6.0cm、幅4.3cm、厚さ2.1cm、TP14・2層からの出土である。4は、黒曜石製の石核である。打面をアトラン

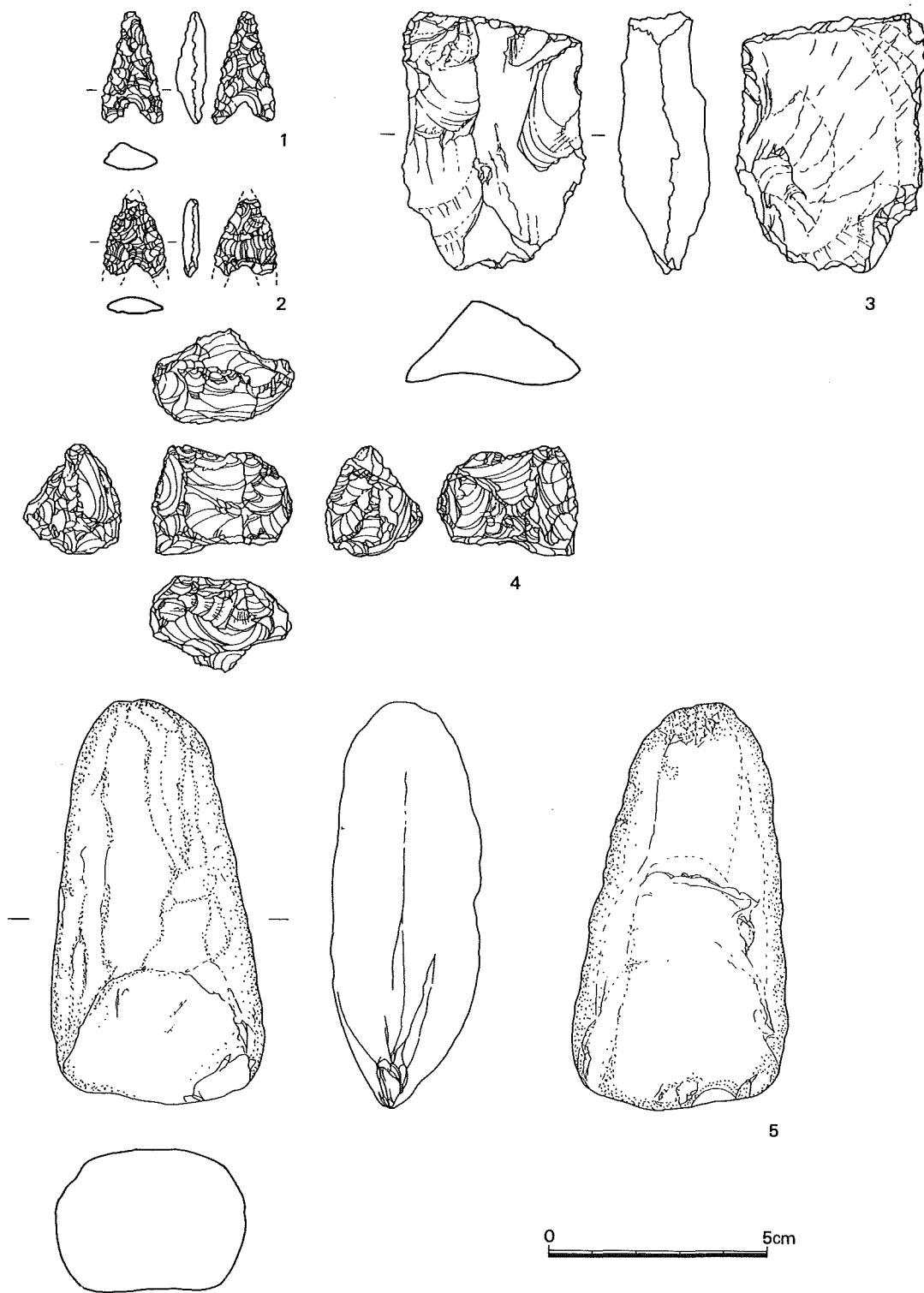




第7図. 大根坂遺跡出土の土器 (TP17・3層) ② (1/3)



第8図. B調査区(第Ⅲa~Ⅲd層)出土土器, 表土・表採資料



第9図. 大根坂遺跡出土及び表面採集の石器 (2/3)

ダムに転移していく石核であるが、最終的にはチョッピングツール状に交互剥離されて稜ができてきている。タテ2.5cm, ヨコ3.25cm, 厚さ2.25cmである。大根坂遺跡表面採集資料である。5は、安山岩製の石斧である。形態的には左右対称でなく、若干片寄った形をしている。刃部は両面から砥ぎ出しているが、これも中心線から若干片側に片寄っている。

長さ9.3cm, 幅4.9cm, 厚さ3.5cm。

#### 引用文献

註1 安楽勉, 藤田和裕『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第37集 1978, 長崎県教育委員会 P,P,15

註2 稲富裕和『富の原』大村市文化財調査報告書第12集 1987, 長崎県大村市教育委員会 P,P,78,79

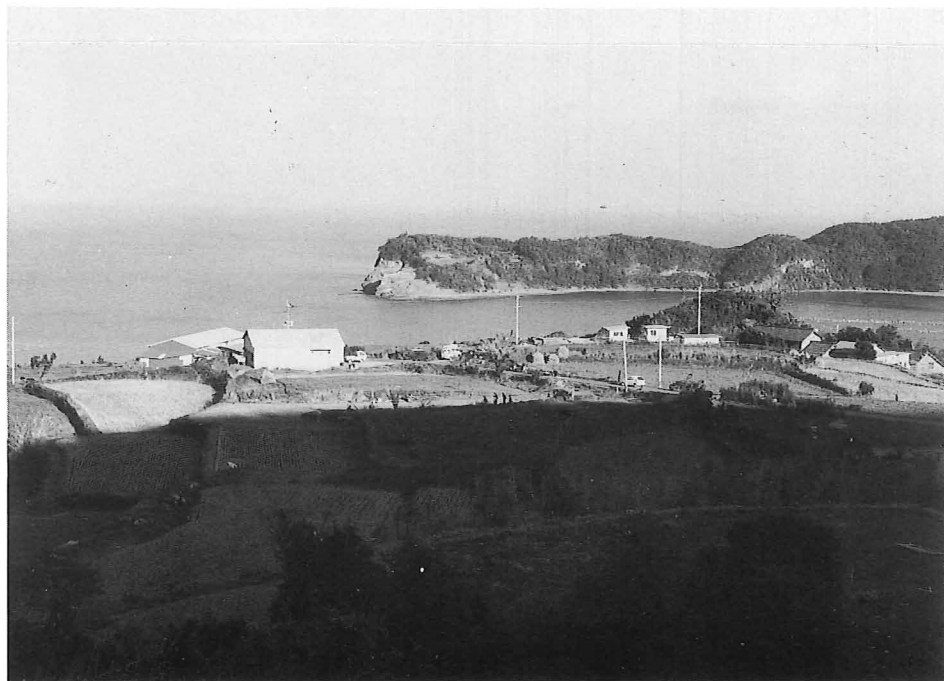
## VI ま と め

大根坂遺跡の調査結果をまとめてみると次のようになる。

- ①試掘調査の結果から農政課サイドと協議を行い、保存の良かった遺跡の中心部（T P 17を設定した水田）と巨石の周辺部（T P 1～4, 15）は、設計変更により現状保存されることとなった。
- ②大根坂遺跡の主体は弥生時代の中期中葉から弥生時代後期初頭の時期である。
- ③T P 17において、4層の地山面を掘り込んだピットを3個検出し、3層の包含層からは弥生時代中期中葉から弥生時代後期初頭の土器が出土した。中には丹塗りの甕や壺等、他にやや大形の獣骨も出土している。T P 17の試掘坑の広さが6㎡と限定された範囲であるので、遺跡の全体的な様相はわからないが、しっかりしたピットが検出されたことから住居跡の可能性があるし、丹塗りの甕や壺の出土をみた事から日常生活とは、また一味ちがったものを考えさせるが、しかし、これを祭祀遺構とするには、まだ、丹塗りの高杯や筒形器台等が不足しており、そのセット関係が不十分である。
- ④時期的には、壱岐の原の辻遺跡、大村市の富の原遺跡等と部分的に並行関係にあるが、近年の調査例の増加または進展により、海を交通手段として広い範囲で交流があったといわれており、それから考えると、この大根坂遺跡のもつ地理的条件（一衣帯水のところに壱岐があり、長崎県本土部にも近い）は、注意すべき意味をもつものかもしれない。
- ⑤この大根坂遺跡の南西に位置する江古ノ辻と、その北東部の城ノ辻には山頂の平坦部または中腹をとりまいて、石塁がめぐらされており、また、城ノ辻の山頂には径2.5m程の円形に石を並べたものが三基ほどあり、烽火場の可能性をもっている。また、石塁の内側は現在は牛の牧場となっているが、その城ノ辻や、城道という地名等から、山城の可能性があり、今後の本格的な調査が期待されるところである。

# 図 版

図版. 1



大根坂遺跡遠景



TP17遺物出土状況〔弥生土器・獣骨（シカ）〕



同上遺物・遺構出土状況

大根坂遺跡TP17遺物・遺構出土状況

図版. 3



TP10 北側土層 (耕土の下は地盤)



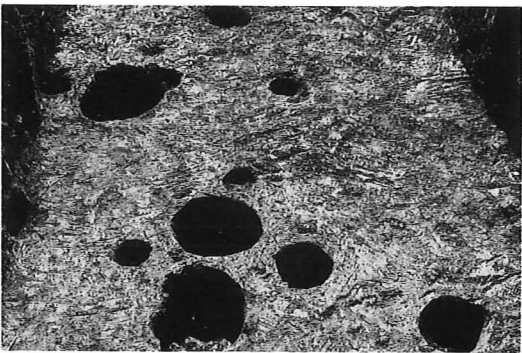
TP13 南壁 (石棺・棺材は見つからなかった)



TP17 北側土層



TP14 柱穴・不明土層検出状況



TP14 柱穴



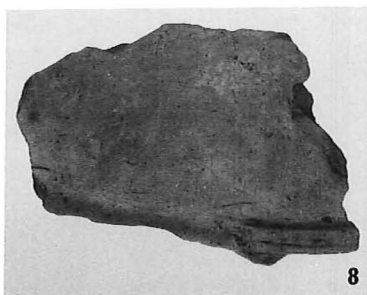
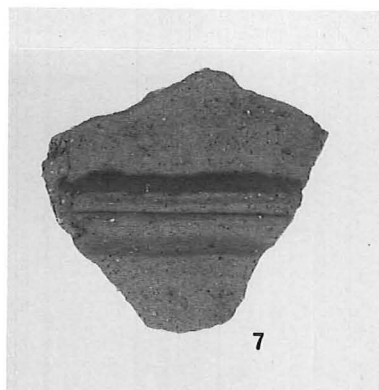
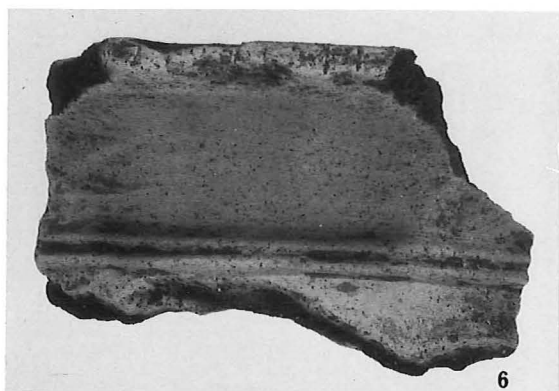
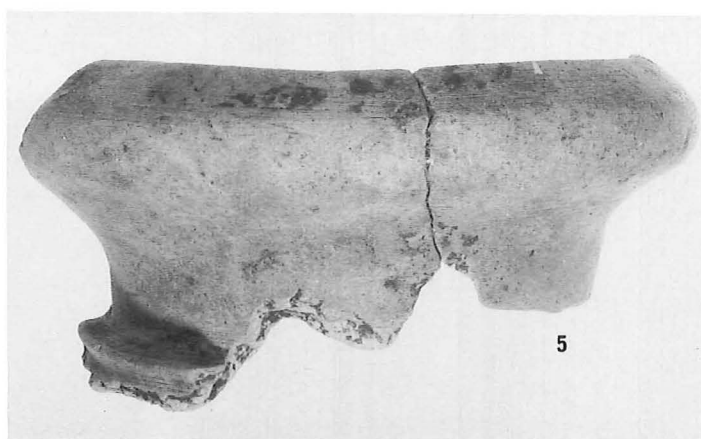
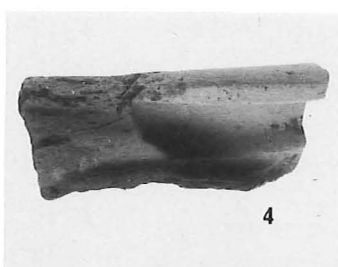
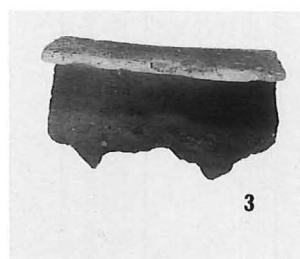
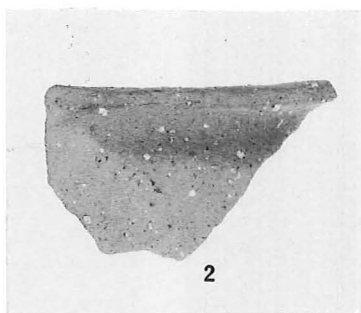
TP14 東側土層



遺跡の埋め戻し状況  
(TP14)

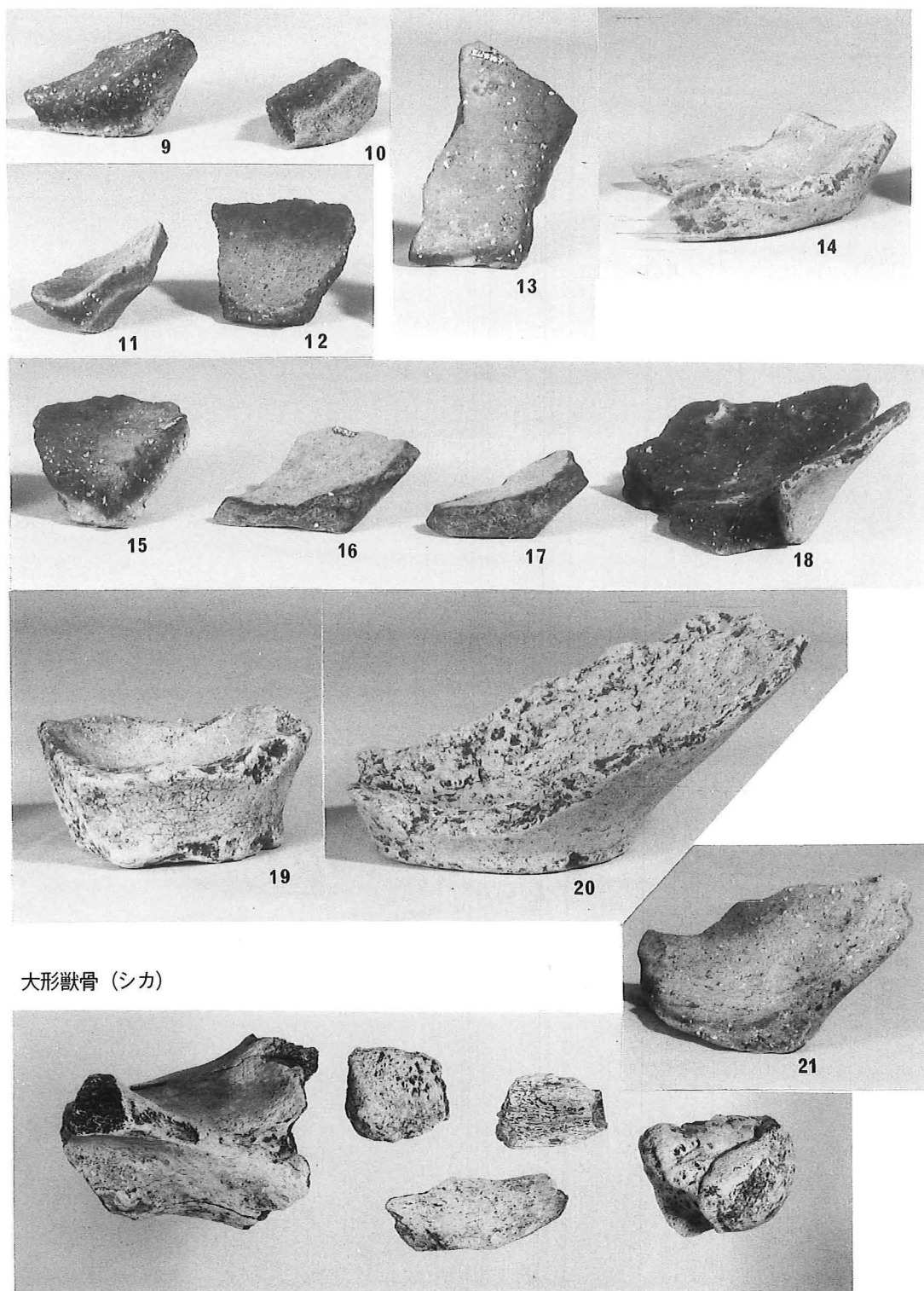
大根坂遺跡調査状況



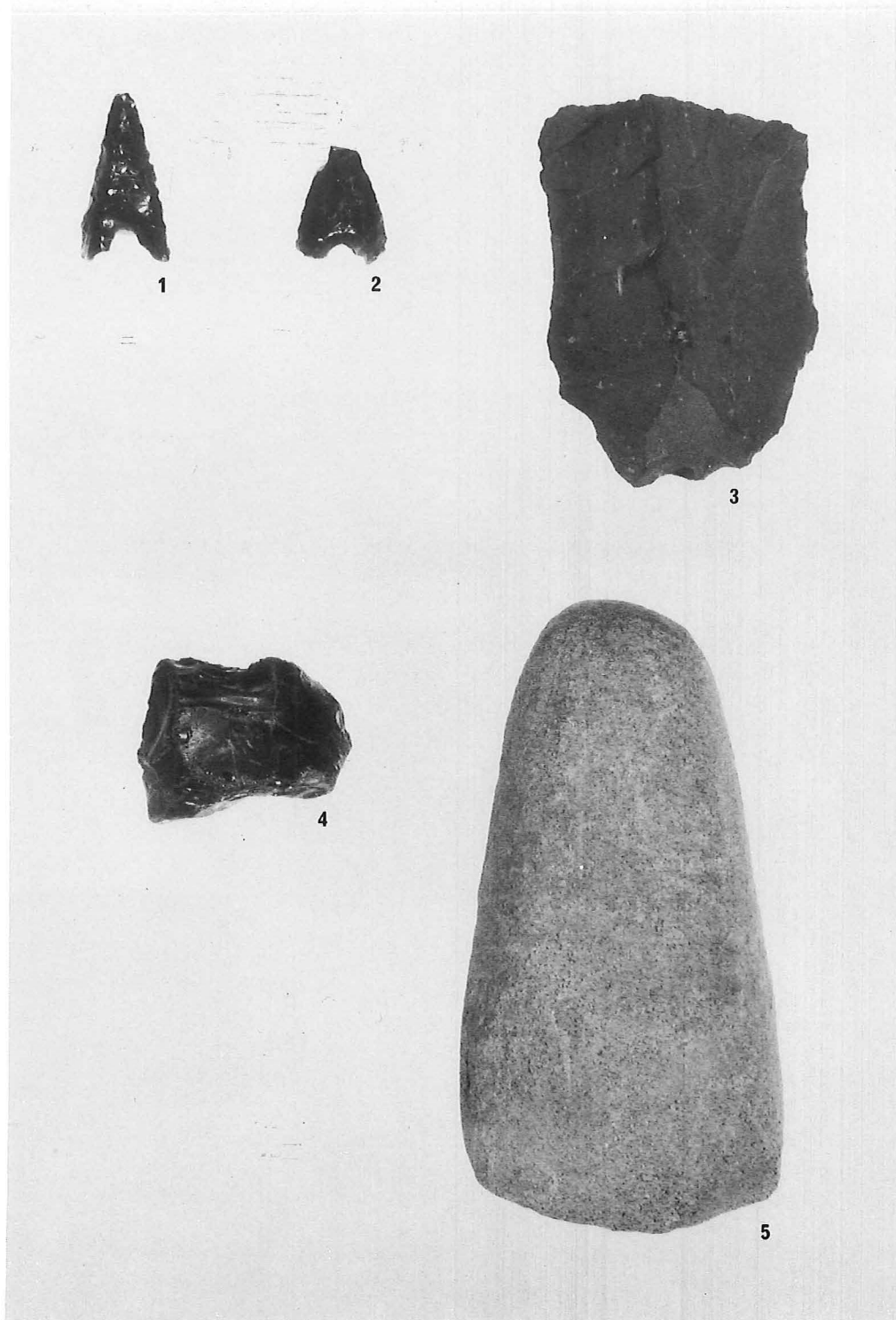


大根坂遺跡 (TP17・3層) 出土の土器 (1/2)

図版. 5

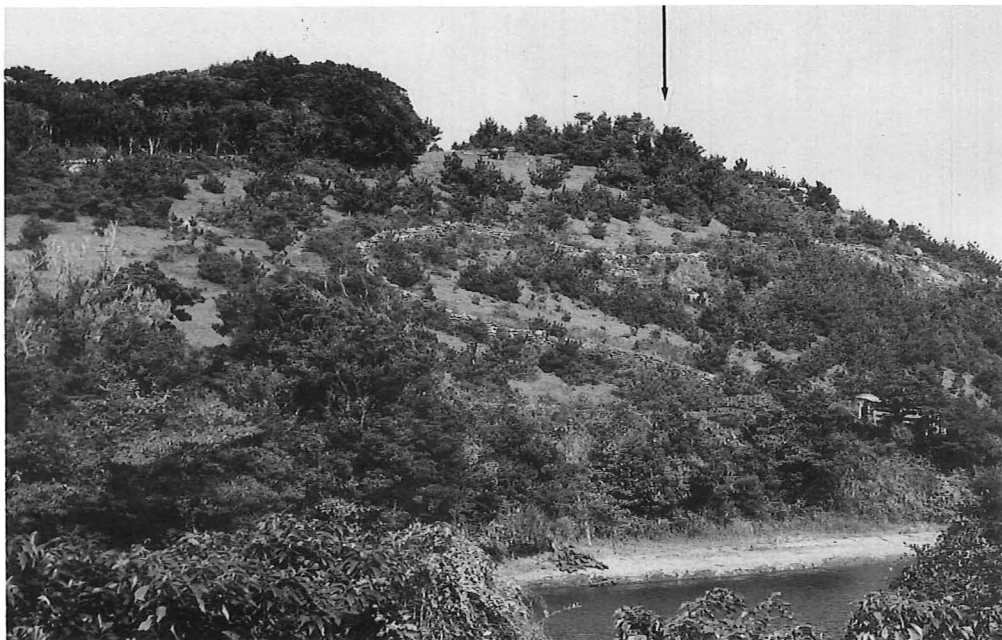


大根坂遺跡 (TP17・3層) 出土の土器と大形獣骨(シカ) (1/2)



大根坂遺跡出土及び表面採集の石器 (1/1)

図版. 7



城ノ辻山頂の径2.5m 程に石を円形にめぐらせた遺構(矢印の部分)  
と山腹を「S字」状にめぐる石塁



城ノ辻山頂の径2.5m 程に石を円形にめぐらせた遺構, 他に2基程,  
同様のものがある。

城ノ辻の遠景及び不明遺構

城ノ辻と江古ノ辻他の近景



城ノ辻より大根坂漁港を望む



城ノ辻中腹の石塁



城ノ辻の石塁



江古ノ辻の石塁



大根坂遺跡内の巨石 (南側から撮影)



城ノ辻の石塁近接写真



同上 (北側から撮影) 支石墓ではないかといわれていたが今回の周辺の調査では石棺等は発見できず。



浄水場東側の作業道の切通し面にのぞいている石棺

長崎県埋蔵文化財調査集報 XV

平成4年3月31日

発行 長崎県教育委員会  
長崎市江戸町2-13

印刷 (有)エスケイ印刷